

令和3年度「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」
沖縄・観光分野における有機的高専連携プログラム開発・実証事業

事業報告書

令和4年3月

学校法人 KBC学園

専修学校インターナショナルリゾートカレッジ

本報告書は、文部科学省の教育政策推進事業委託費による委託事業として学校法人KBC学園 専修学校インターナショナルリゾートカレッジが実施した令和3年度「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」の成果をとりまとめたものです。

目次

| | |
|----------------------------------|----|
| 第1部 事業の概要 | |
| 1 事業の実施体制 | 1 |
| 2 各機関の役割・協力体制 | |
| 2.1 高等学校 | 2 |
| 2.2 行政機関 | 2 |
| 2.3 専門学校 | 3 |
| 2.4 企業 | 3 |
| 3 事業の趣旨・目的等 | |
| 3.1 事業の趣旨 | 4 |
| 3.2 学習ターゲット、目指すべき人物像 | 4 |
| 3.3 当該教育プログラムが必要な背景について | 5 |
| 3.3.1 沖縄観光の現状と新たな展望 | 5 |
| 3.3.2 新しい時代の沖縄観光を支える 人材育成の必要性 | 7 |
| 4 開発する教育プログラムの概要 | |
| 4.1 内容 | 9 |
| 4.2 開発するプログラム全体図 | 11 |
| 4.3 高専連携接続の課題と解決方法 | 11 |
| 5 各年度の取り組み | |
| 5.1 令和3年度 | 12 |
| 5.2 令和4年度 | 12 |
| 5.3 令和5年度 | 13 |
| 5.4 令和6年度 | 13 |
| 5.5 令和7年度 | 14 |
| 5.6 令和8年度 | 14 |
| 5.7 カリキュラム開発スケジュール | 15 |
| 5.8 実証授業スケジュール | 15 |
| 6 事業実施に伴うアウトプット（成果物） | 16 |
| 7 目指すべき指標（令和8年度・最終年度目標） | 17 |
| 8 本事業終了後の成果の活用方針・手法 | 18 |

| | | |
|-----|----------------------------------|----|
| 第2部 | 令和3年度の活動 | |
| 1 | 令和3年度スケジュール | 20 |
| 2 | 連携プログラム開発協議会 | |
| | 2.1 連携プログラム開発協議会の設置 | 21 |
| | 2.2 連携プログラム開発協議会の構成員（委員） | 22 |
| 3 | 事業を進めるにあたっての調査 | |
| | 3.1 高専連携プログラム開発のための ヒアリング調査概要 | 23 |
| | 3.2 高大連携プログラム先行事例視察調査 | 24 |
| 4 | 本事業の方向性協議 | 25 |
| 5 | ヒアリング調査結果 | |
| | 5.1 観光系大学ヒアリング | 26 |
| | 5.2 東京都教育庁ヒアリング | 28 |
| | 5.3 東京都立町田工業高校ヒアリング | 30 |
| | 5.4 沖縄県立具志川商業高校ヒアリング | 31 |
| 6 | ヒアリング調査結果の検討 | 33 |
| 7 | 令和4年度開発プログラム方針の検討 | 34 |

目次

| | |
|-------------------------|----|
| 第 1 部 | |
| 図 1-1 事業の実施体制図 | 1 |
| 図 2-1 各機関の役割と協力体制図 | 2 |
| 図 3-1 県内入域観光客数推移 | 5 |
| 図 3-2 アフター・コロナ時代の沖縄観光 | 7 |
| 図 3-3 沖縄の進学率 | 8 |
| 図 4-1 プログラム概要 | 9 |
| 図 4-2 プログラム概要 | 10 |
| 図 4-3 プログラム全体図 | 11 |
| 図 4-4 高専連携接続の課題と解決方法図 | 11 |
| 図 8-1 本事業終了後の成果の活用方針・手法 | 19 |

表 目次

| | |
|-----------------------|----|
| 第 1 部 | |
| 表 5-1 カリキュラム開発スケジュール | 15 |
| 表 5-2 実証授業スケジュール | 15 |
| 表 6-1 事業実施に伴うアウトプット | 16 |
| 表 7-1 目指すべき指標 | 17 |
| 第 2 部 | |
| 表 1-1 令和 3 年度スケジュール | 20 |
| 表 2-1 連携プログラム開発協議会 | 21 |
| 表 2-2 連携プログラム開発協議会委員 | 22 |
| 表 3-1 事業を進めるにあたっての調査 | 23 |
| 表 3-2 高大連携プログラム先行事例調査 | 24 |

資 料

| | |
|-----------------------|----|
| 観光系大学ヒアリング調査録 | 38 |
| 東京都教育庁ヒアリング調査録 | 41 |
| 東京都立町田工業高等学校ヒアリング調査録 | 44 |
| 沖縄県立具志川商業高等学校ヒアリング調査録 | 46 |

議事録

| | |
|-------------------|----|
| 第1回プログラム検討委員会 議事録 | 52 |
| 第2回プログラム検討委員会 議事録 | 58 |

第1部 事業の概要

1 事業の実施体制

行政機関、高等学校、企業、専門学校四者によるコンソーシアムを構築。「連携プログラム開発協議会」を設立し、高・専一貫プログラムの計画を立案する。

計画を基に開発プログラム実証授業を開催し、プログラムの検証評価委員会によってプログラムの評価を行う。検証結果を基に新たな計画に反映させ実証授業を行う。このPDCAサイクルを有機的に機能させ、実効性・教育効果の高い連携プログラムを開発する。

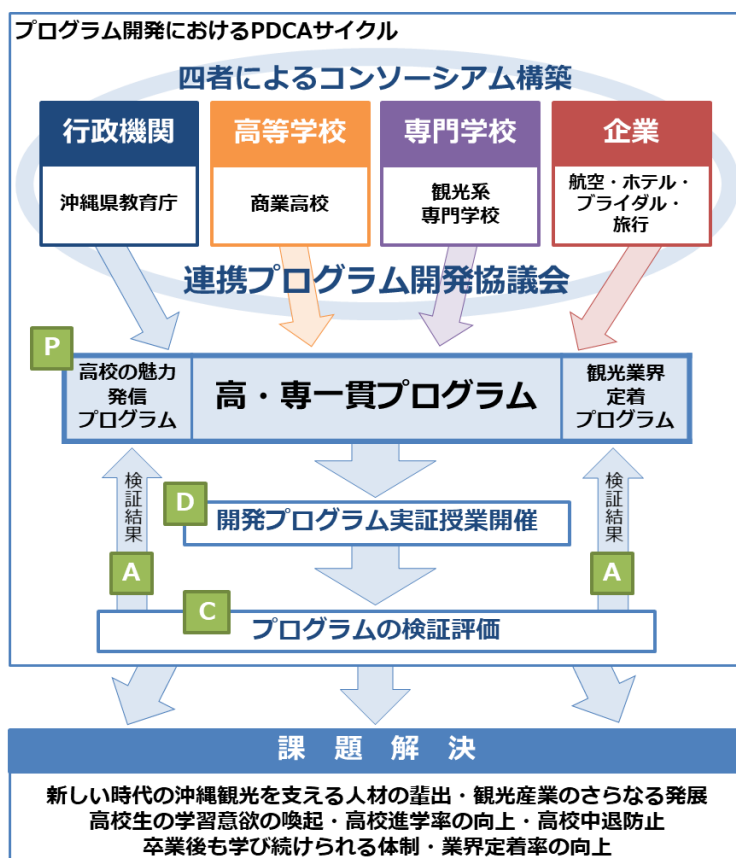


図 1-1 事業の実施体制図

2 各機関の役割・協力体制

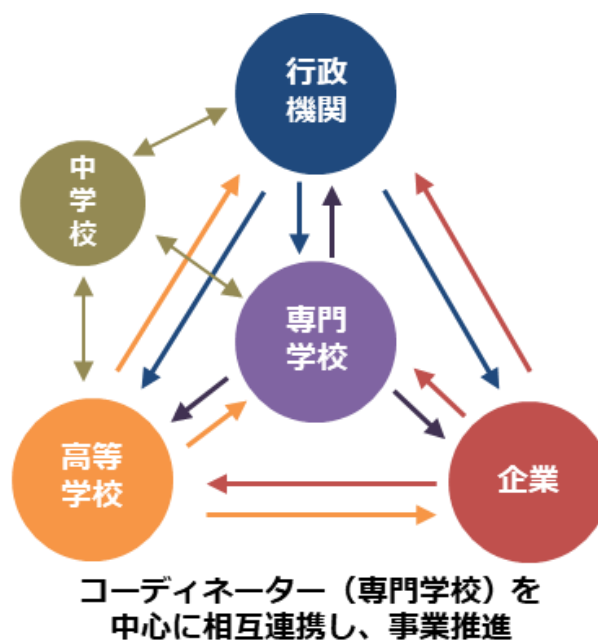


図 2-1 各機関の役割と協力体制図

2.1 高等学校

- 高等学校の課題やニーズ踏まえカリキュラムへ提言
- カリキュラム作成
- 高等学校に進学する中学生への広報周知、募集活動
- 学習指導要領とのすり合わせ

2.2 行政機関

- 地域課題、ニーズ踏まえカリキュラムへ提言
- 高等学校での単位認定の検討、方向性明示
- 県内中学校へ連携強化

2.3 専門学校

○コーディネーター業務

- ・高等学校、行政、企業との橋渡し
- ・全体調整、進捗管理、体制構築
- ・連携プログラム開発協議会の運営
- ・連携校、連携企業の開拓
- ・開発プログラム普及活動

○カリキュラム作成、教材開発

○プログラム受講の高校生への学費減免検討

○高校生の実習受け入れ

○高等学校と企業との仲介

2.4 企業

○業界の課題やニーズを踏まえカリキュラムへ提言

○高校生、専門学校生の実習受け入れ

○職業人講話講師

3 事業の趣旨・目的等

3.1 事業の趣旨

観光産業は沖縄のリーディング産業として県経済をけん引するものであるが、現在は新型コロナウイルス感染症拡大により、多大なダメージを受けている。ウィズ・コロナ時代の後に訪れるアフター・コロナ時代は量を重視する観光から質を重視する観光への転換により、良質で持続可能な観光（サステイナブル・ツーリズム）を目指すべきとしている。我々は新しい時代の沖縄観光を支え、沖縄の観光を量から質へと転換し、良質で持続可能な観光を拡充できる次世代観光人材を育成するプログラムを本事業で開発していく。

開発プログラムは「高校生」「専門学校生」はもちろん、高校と専門学校の前後に位置する「中学生」及び「社会人」も包括する。時系列に見ると、中学と高校の橋渡しとして「高校の魅力発信プログラム」を開発。開発プログラムにより中学生にとっても魅力的な高校となり、地域課題である高校進学率の向上、高校中退防止に繋げる。次に、高校と専門学校で5年かけて学ぶ「高・専一貫プログラム」を開発。共通目標と一貫したカリキュラムを構築し、県経済をけん引する沖縄の観光産業を支える専門人材を育成する。そして、専門学校卒業後も学び続けられる体制づくりとして「観光業界定着プログラム」を開発。離職を減らし、観光業界への定着率を向上する。卒業生の業界での活躍は高・専一貫プログラムで学ぶ高校生と専門学校生の身近な将来像であり、将来像の明確化は共通の目標設定や一貫したカリキュラムの重要な要素となる。

開発プログラムにより沖縄の自然や文化等ソフトパワーを生かした高付加価値の新しいツーリズムが開拓されること、そして、沖縄の自然や文化を守りながら沖縄が世界から選ばれる持続可能な観光地となることに寄与したい。

3.2 学習ターゲット、目指すべき人物像

学習ターゲット：中学生、高校生、専門学校生、社会人

県経済をけん引する沖縄の観光産業を支える専門人材を育成。人材育成により沖縄の自然や文化等ソフトパワーを生かした高付加価値の新しいツーリズムが開拓され、沖縄の自然や文化を守りながら沖縄が世界から選ばれる持続可能な観光地へと発展させる。

3.3 当該教育プログラムが必要な背景について

3.3.1 沖縄観光の現状と新たな展望

◆ウィズ・コロナ時代の沖縄観光

現在、新型コロナウイルス感染症は沖縄県経済のリーディング産業である観光産業をはじめ、ありとあらゆる業界に多大なダメージを与えている。沖縄県文化観光スポーツ部観光政策課は今年4月、2020年度の県内入域観光客数が前年度比72.7%（688万5600人）減の258万3600人だったと発表した。新型コロナウイルス感染拡大に伴う旅行の自粛等により、過去最大の減少幅となった。国内客は63%（439万5200人）減の258万3600人。コロナ感染拡大によるGo Toトラベル事業の一時停止や、国や県の緊急事態宣言が出されたことなどが影響した。外国客は19年度に249万400人だったが、20年度は0人。20年3月に国際線が全便運休となり、4月以降はゼロが続いている状態で、クルーズ船とともに運航再開の目途は立っていない。

ウィズ・コロナ時代の方針として、県は空港や港湾における水際対策や医療体制の拡充、検査拡大の推進を掲げている。観光産業復活の土台として、「安全・安心の島沖縄」の推進と国内外のターゲットを明確にしたプロモーションの展開が今まさに必要である。

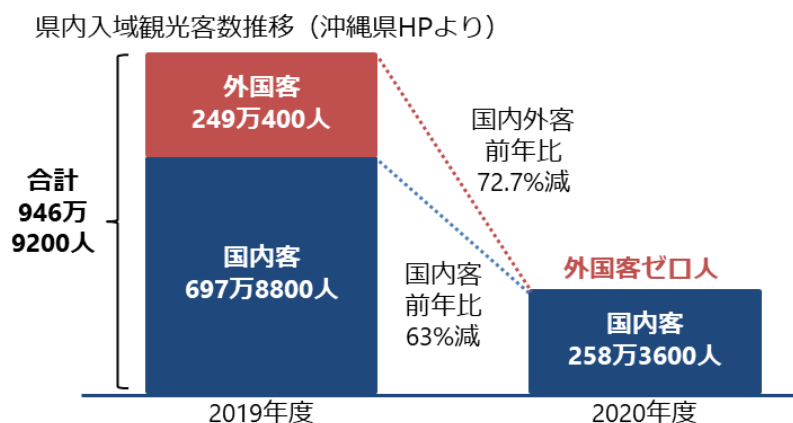


図 3-1 県内入域観光客数推移

◆アフター・コロナ時代の沖縄観光

コロナ前は沖縄に限らず、世界全体で海外旅行者数の増大、特にアジア等新興国からの旅行者数の大きな伸びが見込まれる一方で、観光が自然環境への影響や住民とのあつれき等、負の影響（オーバーツーリズム）をもたらしていた。持続的に発展する観光産業を目指す上では、観光における「量から質への転換」が重要である。そこで、沖縄県は今後の沖縄観光の基本方針として、

- (1) 観光リスクに対応する仕組みづくり
- (2) 持続可能な観光政策の推進
- (3) 持続可能な観光指標
- (4) 高次元のニーズに対応した質の高い観光の推進
- (5) 沖縄のソフトパワーを生かしたツーリズムの展開
- (6) 観光産業の多様化と高付加価値化
- (7) バリアフリー化の促進
- (8) 観光管理の強化とレスポンシブル・ツーリズムの推進
- (9) ターゲットマーケティングへのシフトチェンジ

を挙げている。(沖縄県「ウィズ・コロナ、アフター・コロナ時代の新たな沖縄観光基本方針」2021年3月より引用)

◆高次元ニーズ対応の観光推進と沖縄らしいSDGsの実現

多くの観光客を惹きつける力（＝ソフトパワー）として自然（気候、海、陸、空、島々等）、沖縄固有の文化や歴史的資源がある。また、健康長寿という沖縄のソフトパワーを活用したウェルネス・ツーリズムは今後のターゲットマーケティング展開の1つの切り口と言える。さらに、沖縄の自然、歴史、文化など魅力ある観光リゾート資源を生かした MICE（ビジネスイベント）との効果的連携や障害者対応をはじめとするユニバーサル・ツーリズム、野球やサッカーのキャンプ・大会誘致等、温暖な気候や既存インフラを活用したスポーツ・ツーリズムなど、高次元のニーズに対応した質の高い観光を推進する必要がある。そして、高次元ニーズ対応の観光推進と同時に、「沖縄らしいSDGs」の実現を目指していかなければならない。

3.3.2 新しい時代の沖縄観光を支える人材育成の必要性

◆沖縄が目指すべき新しい時代の観光

従来の量だけを追い求める観光は観光先の自然や文化、地元住民の生活に負の影響を与えることが多かったことを背景に、観光と地域の共存・共生に向けた新たなコンセプトとして、観光客と地域住民が価値を共有するレスポンシブル・ツーリズム（責任ある観光）が国際的な広がりを見せている。観光客数の増加と自然・文化の保護、住民とのバランスは沖縄にとっても解決すべき課題である。量から質を重視する観光への転換により、良質で持続可能な観光（サステイナブル・ツーリズム）を目指すべきである。

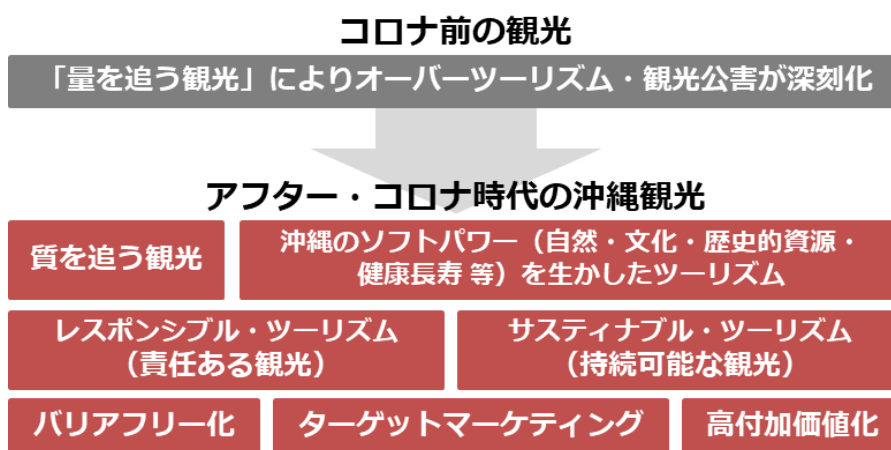


図 3-2 アフター・コロナ時代の沖縄観光

◆次世代観光人材育成の必要性

観光産業は沖縄のリーディング産業として県経済をけん引し、コロナ収束後もさらなる成長と発展が必須である。我々専門学校にとって、新しい時代の沖縄観光を支え、沖縄の観光を量から質へ転換し、良質で持続可能な観光を拡充できる次世代観光人材を育成することは今、最大の使命と言える。そこには、ウェルネス・ツーリズム等新しいツーリズムの開拓、オーバーツーリズムからレスポンシブル・ツーリズムへの転換など、新しい知識醸成が必要である。

◆「高専連携プログラム」による人材育成の意義

内閣府「沖縄の子供達を取り巻く現状」より、沖縄県の高校進学率は97.3%で全国順位は低いほうから1位、高校中退率は2.2%で全国順位は高いほうから1位となっている。沖縄県の大学等進学率は39.6%で全国順位は低いほうから1位であるが、専修学校進学率は24.1%で全国順位は高いほうから2位となっている。なお、沖縄県の子どもたちの相対的貧困率は29.9%で、全国平均の約2.2倍にのぼり、1人当たり県民所得は全国最下位となっている。

| 指標 | 沖縄 | 全国 | 沖縄の順位 |
|-------------|------|------|----------|
| 高校進学率 (%) | 97.3 | 98.8 | 低いほうから1位 |
| 高校中退率 (%) | 2.2 | 1.4 | 高いほうから1位 |
| 大学等進学率 (%) | 39.6 | 54.7 | 低いほうから1位 |
| 専修学校進学率 (%) | 24.1 | 16.4 | 高いほうから2位 |

図 3-3 沖縄の進学率

専修学校への進学希望者が多い沖縄で、高校から5年という年月をかけて教育していくことは新しい時代の沖縄観光を支えるために必要不可欠である。現在、高校1年生（16歳）が専門学校教育を経て社会人となる2026年頃には沖縄のソフトパワーを生かした高付加価値の新しいツーリズムが開拓されつつも、沖縄の自然や文化、地域住民を守り、世界から選ばれる持続可能な観光地となることが強く求められる。

「ただ人数を追うのではなく、継続的に沖縄に来てくださるお客様、沖縄でお金を使っただけのお客様、お金だけではなく沖縄の自然や文化に対して尊敬の念を持っただけの質の高いお客様を求め、獲得していくこと」を高専連携プログラムで習得し、実践できる人材に育成していかなければならない。そして、アフター・コロナ時代に、高専連携プログラムで学んだ卒業生が即戦力となり、沖縄県のリーディング産業である観光をけん引していくことで、子どもの貧困率低下、そして県民所得増加という地域課題解決に寄与していく。

4 開発する教育プログラムの概要

4.1 内容

◆新しい時代の沖縄観光を支える人材を育成する総合プログラムを開発

沖縄の観光を量から質へ転換し、良質で持続可能な観光を拡充できる次世代観光人材を育成するために本事業で開発するプログラムは「高校」「専門学校」の前後に位置する「中学」「卒業後」を包括した総合プログラムとする。

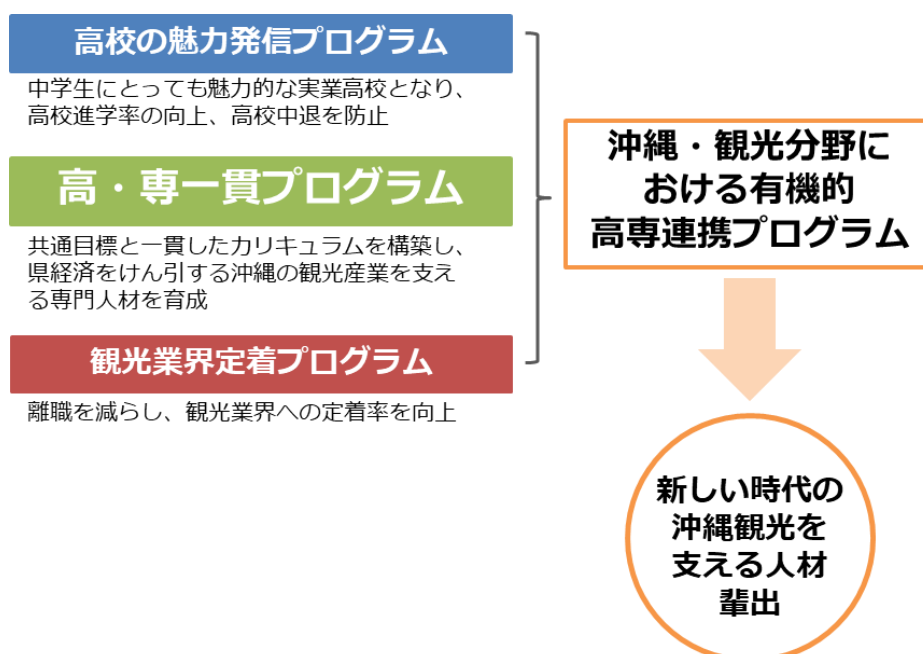


図 4-1 プログラム概要

◆問題意識を持ち、解決法を考え、実践できる人材を育成

プログラム受講者が「5種」の観光人材に成り代わり、「7種」の問題の解決法を考える。新しい時代の沖縄観光を担う若い世代がプログラム通して沖縄の観光を量から質へ転換する方法を自ら問題提起し、解決法を見出し、実践していく。その実践力が県のリーディング産業である沖縄観光の未来を支え、沖縄を世界から選ばれる持続可能な観光地にしていく。

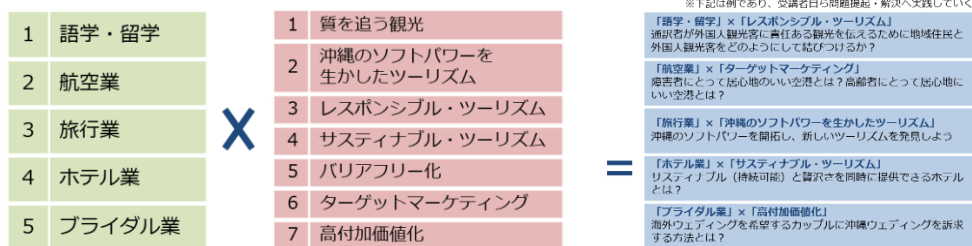


図 4-2 プログラム概要

4.2 開発するプログラム全体図

◆開発するプログラム全体図

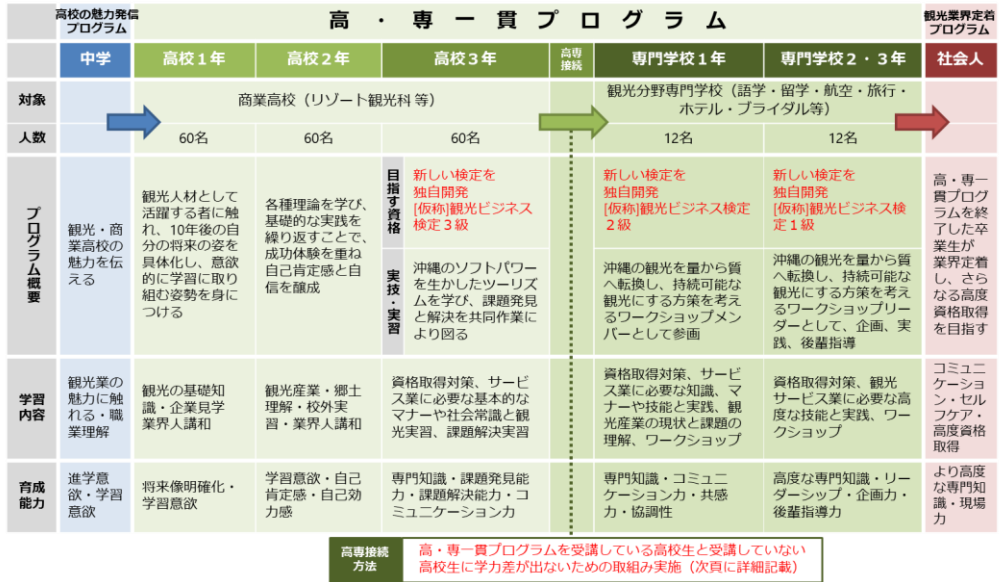


図 4-3 プログラム全体図

4.3 高専連携接続の課題と解決方法

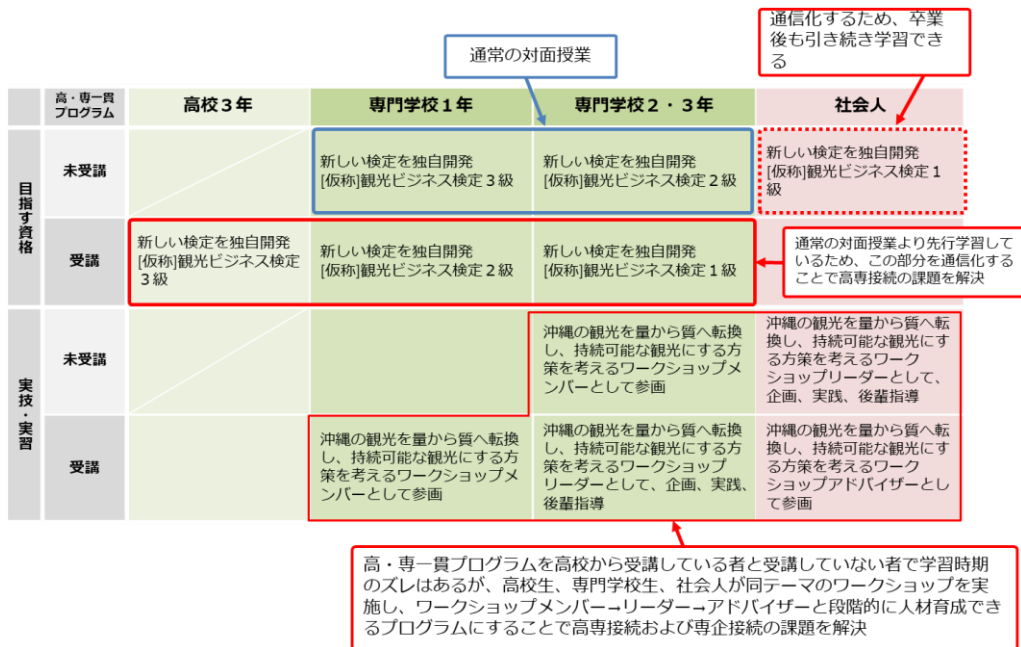


図 4-4 高専連携接続の課題と解決方法図

5 各年度の取り組み

5.1 令和3年度

1. ヒアリング調査

高校教師、専門学校教員、企業、高校生、専門学校生 等

2. 視察調査

先行事例視察調査

3. プログラム開発協議会開催

目的明確化、スケジュール確認

開発カリキュラム課題整理

開発カリキュラム方向性決定

4. コーディネーター業務

高等学校、行政、企業の橋渡し

全体調整、進捗管理、体制構築

連携校、連携企業の開拓

5.2 令和4年度

1. カリキュラム開発

高校向けカリキュラム

2. 教材開発

高校生向け教材、シラバス、コマシラバス開発

3. 実証授業の開催

授業実施、アンケート集計、検証評価

※受講対象者：高校生

4. プログラム開発協議会開催

開発カリキュラム課題整理

高専接続方法検討

5. コーディネーター業務

高等学校、行政、企業の橋渡し

全体調整、進捗管理、体制構築

連携校、連携企業の開拓

5.3 令和5年度

1. カリキュラム開発
 - 高校生向けカリキュラム
 - 専門学校向けカリキュラム
2. 教材開発
 - 高校生向け・専門学校生向け教材、シラバス、コマシラバス開発
3. 実証授業の開催
 - 授業実施、アンケート集計、検証評価
 - ※受講対象者：高校生、専門学校生
4. プログラム開発協議会開催
 - 開発カリキュラム課題整理
 - 社会人向けカリキュラム検討
 - 高校の魅力発信（中学校向け）方法検討
5. コーディネーター業務
 - 全体調整、進捗管理、体制構築
 - 連携校、連携企業の開拓

5.4 令和6年度

1. カリキュラム開発
 - 高校生向け通信教材
 - 専門学校生向けカリキュラム
 - 社会人向けカリキュラム
2. 教材開発
 - 教材、シラバス、コマシラバス開発
3. 実証授業の開催
 - 授業実施、アンケート集計、検証評価
 - ※受講対象者：高校生、専門学校生、社会人
4. プログラム開発協議会開催
 - 開発カリキュラム課題整理
 - 就職への連結方法検討

5. コーディネーター業務

- 全体調整、進捗管理、体制構築
- 連携校、連携企業の開拓
- プログラム受講の高校生への学費減免検討

5.5 令和7年度

1. カリキュラム開発

- 専門学校向けカリキュラム
- 社会人向けカリキュラム

2. 教材開発（通学・通信）

- 教材、シラバス、コマシラバス開発

3. 実証授業の開催

- 授業実施、アンケート集計、検証評価
- ※受講対象者：専門学校生、社会人、中学生

4. プログラム開発協議会開催

- 開発カリキュラム課題整理

5. コーディネーター業務

- 連携校、連携企業の開拓
- プログラム受講の高校生への学費減免検討

5.6 令和8年度

1. 成果普及のための取組み

- 他校での実証授業開催
- 採用高校、採用専門学校の拡大

2. 教材開発

- 教材、シラバス、コマシラバス開発

3. 実証授業の開催

- 授業実施、アンケート集計、検証評価
- ※受講対象者：社会人、中学生

4. 実証踏まえて教育効果検証

- 開発カリキュラム検証
- 開発教材、シラバス、コマシラバス検証
- 実証授業教育効果検証

5. 事業最終報告

事業最終報告書作成

普及のための Web サイト、冊子制作

6. プログラム開発協議会開催

開発カリキュラム課題整理

7. コーディネーター業務

連携校、連携企業の開拓

プログラム受講の高校生への学費減免検討

5.7 カリキュラム開発スケジュール

| 年度 | 高校生向け | 専門学校生向け | 社会人向け | 中学生向け |
|-------|----------|----------|----------|----------|
| R3 年度 | | | | |
| R4 年度 | カリキュラム開発 | | | |
| R5 年度 | ↓ | カリキュラム開発 | | |
| R6 年度 | カリキュラム完成 | ↓ | カリキュラム開発 | |
| R7 年度 | | カリキュラム完成 | ↓ | カリキュラム開発 |
| R8 年度 | | | カリキュラム完成 | カリキュラム完成 |

表 5-1 カリキュラム開発スケジュール

5.8 実証授業スケジュール

| 年度 | 高校生向け | 専門学校生向け | 社会人向け | 中学生向け |
|-------|-----------|---------|-----------|-----------------|
| R3 年度 | | | | |
| R4 年度 | 県内連携高校 | | | |
| R5 年度 | 県内高校（観光系） | 県内専門学校 | | |
| R6 年度 | 県外高校（観光系） | 県内専門学校 | 定着支援プログラム | |
| R7 年度 | | 県外専門学校 | 定着支援プログラム | 中学生向けキャリア教育支援 |
| R8 年度 | | | 定着支援プログラム | 中学生向けキャリア教育支援授業 |

表 5-2 実証授業スケジュール

6 事業実施に伴うアウトプット（成果物）

| 年度 | 成果物 |
|-------|---|
| 令和3年度 | 1. ヒアリング・視察調査分析報告書 2. 事業報告書、Web サイトでの報告、事業 PR 動画 |
| 令和4年度 | 1. 開発プログラム（高校3年向け） 2. 教材、シラバス、コマシラバス 3. 評価基準及び評価シート 4. 事業報告書、Web サイトでの報告、事業 PR 動画 |
| 令和5年度 | 1. 開発プログラム（高校1、2年向け） 2. 教材、シラバス、コマシラバス 3. 評価基準及び評価シート 4. 事業報告書、Web サイトでの報告、事業 PR 動画 |
| 令和6年度 | 1. 開発プログラム（専門学校1年向け） 2. 教材、シラバス、コマシラバス 3. 評価基準及び評価シート 4. 事業報告書、Web サイトでの報告、事業 PR 動画 |
| 令和7年度 | 1. 開発プログラム（専門学校2、3年向け） 2. 教材、シラバス、コマシラバス 3. 評価基準及び評価シート 4. 事業報告書、Web サイトでの報告、事業 PR 動画 |
| 令和8年度 | 1. 開発プログラム（全体） 2. 教材、シラバス、コマシラバス 3. 評価基準及び評価シート 4. 事業最終報告書、Web サイトでの報告 5. 事業 PR 動画 6. 普及に向けた冊子制作 |

表 6-1 事業実施に伴うアウトプット

7 目指すべき指標（令和8年度・最終年度目標）

| 項目 | 目標数 | 目標達成に向けた方策 |
|-----------------------------|-----------------------|---|
| 連携プログラム導入高校数 | 3校 | コーディネーターが連携校の開拓を 通年実施し、導入高校、導入高校生 を増やしていく。また、高校と企業 の仲介役となり、企業見学や実習等 を積極的にコーディネートしてい く。 |
| 連携プログラム受講高校生数 | 60名 (各学年20名 ずつ) | |
| 連携プログラム受講の高校生の 中退者数 | 0人 | 高校生へのキャリア教育を実施し、 将来像を明確化する。中学生にも同 様に高校の魅力発信プログラムによ り、キャリア教育を実施し、将来像 を明確化する。 |
| 連携プログラム受講の高校生の 当該分野への進学率 | 20%以上 | |
| 専門学校（当学園）中退者数 | 0人 | 資格取得対策の通信化により効率的 に学習できる環境を整える。 |
| 専門学校生 マナープロトコール 2級 資格取得率 | 60%以上 | |
| 専門学校生の当該分野への 就職率 | 95%以上 | 職場でのコミュニケーションやセル フケア法を観光業界定着プログラム で実施。 |
| 卒業生の離職率 | 30%以下 | |

表 7-1 目指すべき指標

8 本事業終了後の成果の活用方針・手法

◆成果普及の方向性

開発プログラム（カリキュラム、教材等）及び「高校」「行政」「企業」「専門学校」の4者が有機的に連携することにより構築したネットワークの構築法や連携法を普及するには右図のように「タテ展開」と「ヨコ展開」を同時に進めていくことが重要である。

【タテ展開】

●全国の観光分野専門学校に開発プログラム・導入ノウハウ普及

沖縄県専修学校各種学校連合会や全国専門学校教育研究会等通じて、成果報告し、開発プログラムや導入ノウハウを普及していく。

●地域社会に事業周知・認知度向上

地域課題解決を目的に開発したプログラムであることを周知し、プログラムの認知度を向上していく。プログラム内で実施するワークショップは地域住民にも学んでいただきたい内容となっており、生涯教育の一環として、地域社会に提供していく。

【ヨコ展開】

●「導入高校」及び「連携企業」を増やす

事業終了後もコーディネーターが高校及び企業を訪問し、導入高校、連携企業を増やしていく。また、観光以外の分野で高専連携ができないか検討していく。

◆成果普及方法

1. カリキュラムを改訂しながら、授業継続
2. 授業実施状況を SNS 等で情報発信
3. 開発プログラム、導入事例の Web 公開
4. 普及活動のための冊子を制作
観光分野専門学校、地域社会、県内高校、県内企業に配付

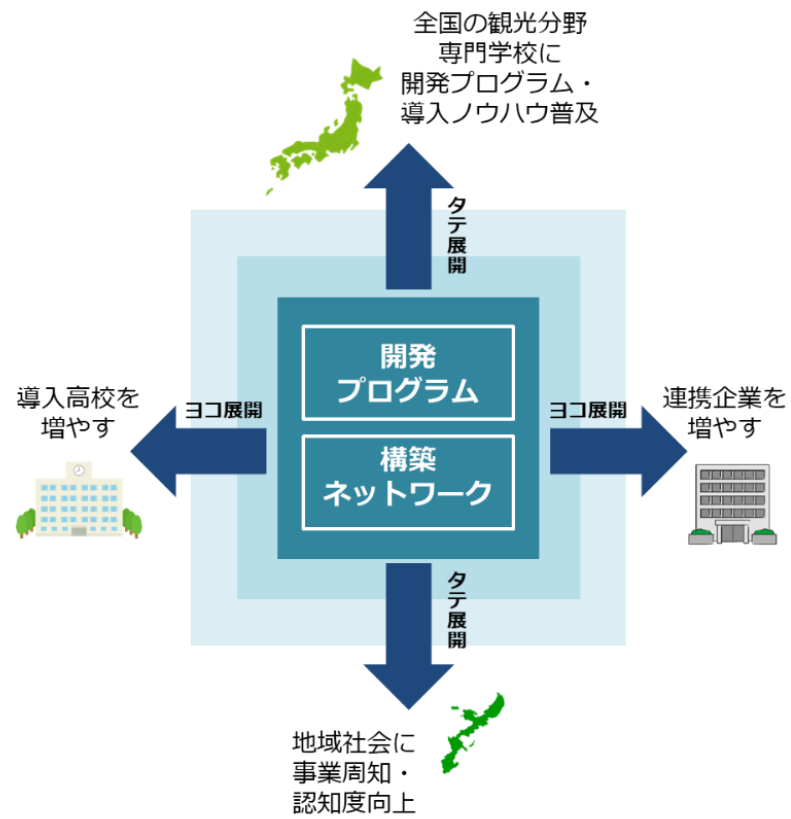


図 8-1 本事業終了後の成果の活用方針・手法

第2部 令和3年度の活動

1 令和3年度スケジュール

| 時期 | 連携プログラム開発協議会 | ヒアリング・視察調査 | プログラム開発 | コーディネーター業務 |
|-----|--------------|----------------|-----------|-----------------------------|
| 9月 | | | | 委員依頼・委員就任 |
| 10月 | | ヒアリング・視察調査先の選定 | プログラム素案作成 | 高校・行政・企業への周知、連携プログラム開発協議会運営 |
| 11月 | 第1回開催 | ヒアリング調査 | | 連携校、連携企業の開拓 |
| 12月 | | 視察調査 | ▼ | |
| 1月 | | 調査分析、報告書作成 | 課題・ニーズ整理 | ▼ |
| 2月 | 第2回開催 | | 開発内容選定 | 連携プログラム開発協議会運営 |
| 3月 | | | プレ開発 | 事業報告書作成 |

表 1-1 令和3年度スケジュール

◆開発に向けた学内及び協力機関間での調整に関する見込み

プログラム開発のための協議会開催

プログラム開発に向け、高校・専門学校・教育行政・企業が横断的に連携するプログラム開発協議会を発足。

各機関より委員を選定し、現場の抱える課題や、解決に向けての方法を検討。

開催回数：令和3年度…年2回 令和4年度～8年度…年3回

コーディネータープロフィール

沖縄県内でホテルやレンタカー会社などを顧問先に持つ「社会保険労務士國場経営事務所 労働保険事務組合 沖縄労務研究センター」内間英喜 部長に就任を依頼。

労務関係の内容を中心に企業側の相談に応じる機会が多く、企業側へのネットワークはもちろん、その内情についてもよくご存じであり、その知見をコーディネーターとして発揮頂ける人材である。

2 連携プログラム開発協議会

2.1 連携プログラム開発協議会の設置

| | | | |
|--------------|--|------|--------------------------|
| 目的・役割 | 高等学校、行政、専門学校、企業の四者による高専連携プログラム開発に向けた協議会を発足、プログラム開発に向けた委員会を開催する。ヒアリング調査の分析、課題及びニーズ整理、開発内容の選定を行う。また、開発プログラムの課題整理、導入に向けた手順を整理する。 | | |
| 検討の 具体的内容 | <p>令和3年度</p> <p>目的明確化、スケジュール確認 調査分析、課題及びニーズ整理 目指す人材像の明確化 開発カリキュラム内容整理 開発カリキュラム方向性決定</p> <p>令和4～8年度</p> <p>開発カリキュラム作成 開発カリキュラム課題整理 開発カリキュラム導入手順整理 開発カリキュラム検証 開発教材、シラバス、コマシラバス検証 実証授業教育効果検証 プログラム受講の高校生への学費減免検討 全国普及に向けた課題整理 全国普及に向けた取組み検討</p> | | |
| 委員数 | 14人 | 開催頻度 | 令和3年度：年2回 令和4～8年度：年3回 |

表 2-1 連携プログラム開発協議会

2.2 連携プログラム開発協議会の構成員（委員）

| | 氏名 | 所属・職名 | 役割等 | 都道府県名 |
|----|--------|--|-----|-------|
| 1 | 宮城 仁 | 沖縄県立具志川商業高等学校 教諭 | 委員 | 沖縄県 |
| 2 | 伊波 貴文 | 沖縄県教育庁県立学校教育課 指導主事 | 委員 | 沖縄県 |
| 3 | 立石 公平 | 学校法人静岡理工科大学 静岡インターナショナル・ エア・リゾート専門学校 教務課長代理 | 委員 | 静岡県 |
| 4 | 山城 秀康 | 株式会社国際旅行社 取締役総務部長 | 委員 | 沖縄県 |
| 5 | 高橋 俊博 | タピック沖縄株式会社 ユインチホテル南城 管理部 戦略人事課長 | 委員 | 沖縄県 |
| 6 | 新里 麻未子 | 沖縄ワタベウェディング株式会社 人事総務 グループ 人材開発チーム リーダー | 委員 | 沖縄県 |
| 7 | 川北 奈津子 | JAL スカイエアポート沖縄株式会社 地域事業推進室 スーパーバイザー | 委員 | 沖縄県 |
| 8 | 近藤 賢宏 | 学校法人KBC学園インターナショナル リゾートカレッジ 教務部長 | 委員長 | 沖縄県 |
| 9 | 新里 治 | 学校法人KBC学園 インターナショナル リゾートカレッジ 事務局長 | 委員 | 沖縄県 |
| 10 | 新里 玲子 | 学校法人KBC学園 インターナショナル リゾートカレッジ 教務課長 | 委員 | 沖縄県 |
| 11 | 細谷 麻衣 | 学校法人KBC学園 インターナショナル リゾートカレッジ 就職課主任 | 委員 | 沖縄県 |
| 12 | 田村 明子 | 学校法人KBC学園 インターナショナル リゾートカレッジ 教務課主任 | 委員 | 沖縄県 |
| 13 | 仲宗根 真 | 学園本部 経営企画部 部長 | 事務局 | 沖縄県 |
| 14 | 喜納 政一 | 学園本部経営企画部 進路相談課課長 兼 就職支援担当 | 委員 | 沖縄県 |

表 2-2 連携プログラム開発協議会委員

3 事業を進めるにあたっての調査

3.1 高専連携プログラム開発のためのヒアリング調査概要

| | |
|----------------------------|---|
| 調査目的 | 各教育機関、産業界、教育行政の現状と課題を明らかにし、ニーズを満たし、課題を解決するためのプログラム開発を行う。 |
| 調査対象 | ①高等学校②専門学校③企業④県教育委員会⑤高校生⑥専門学校生 |
| 調査手法 | 面接（個別・集団）調査法 |
| 調査項目 | <p>①高等学校教師 （入口）中学校連携教育の課題 （中身）学科の教育ニーズ・課題 （出口）職業教育の課題</p> <p>②専門学校教員 （入口）高専連結の課題 （中身）学科の教育ニーズ・課題 （出口）地域産業連結の課題</p> <p>③企業 （入口）人材確保のニーズ・課題 （中身）社内教育ニーズ・課題</p> <p>④県教育委員会 「中高専大教育連携」のニーズと課題</p> <p>⑤高校生 高校進学学科決定要因・中学職業教育調査・学科科目・実習のニーズ 職業意識調査・進学決定要因調査</p> <p>⑥専門学校生 専門学校進学決定要因・高校職業教育調査・学科科目のニーズ・満足度調査 職業意識調査</p> |
| 分析内容 | 調査項目の分析のみならず、潜在的ニーズや課題の考察を行う。 |
| 開発するプログラムにどのように反映するか（活用手法） | <ul style="list-style-type: none"> ・高校カリキュラム 生徒と高校ニーズに沿った高校1～3年連結カリキュラムの作成。中高職業教育連結カリキュラムの作成。 ・専門学校カリキュラム 企業ニーズに沿った専企連結カリキュラムの作成。 |

表 3-1 事業を進めるにあたっての調査

3.2 高大連携プログラム先行事例視察調査

| | |
|--------------------------------|--|
| 調査目的 | 連携プログラムを進めるにあたっての課題と実現に有効な手続き・手法等、プログラムの実現障壁を軽減、取り除くことを目的とする。 |
| 調査対象 | <ul style="list-style-type: none"> ・観光系大学（予定）※匿名 ・鹿児島市立鹿児島商業高校（予定） |
| 調査手法 | 面接調査法 |
| 調査項目 | 連携プログラムを進めるにあたる課題と実現に有効な手続きや手法を調査 |
| 分析内容 (集計項目) | 連携プログラムを進めるにあたっての課題有効な手続き・手法等 |
| 開発するプログラムにどのように反映するか (活用手法) | 連携プログラム検討委員会、カリキュラム・プログラム開発に反映する。 |

表 3-2 高大連携プログラム先行事例調査

4 本事業の方向性協議

第一回プログラム検討委員会を開催し、本事業概要と事業内容の協議を行った。

○「観光ビジネス」科目は、教科書は発行されていないため、どのような内容で授業を組み立てるか未定の部分がある。県内の観光に関する学科において「観光ビジネス」の教科書を活用するのは、令和5年度以降となるであろう（2年次を想定しているため）。

○コロナ禍の影響で今まで企業や専門学校が行ってくれていた授業や講話が実施できていないので（高校側からすると）インターンシップなどの機会提供はありがたい。

○インターンシップについて、中学生は職業体験といわれている。中学、高校、大学生と（学年の違いによって）学んでいる内容や知識のベース、プログラムの違いによって（インターンシップ）のとらえ方に差がある。

○学んだこと、身についたものが社会にどのようにつながっていくか実体験につながることを重視している。

○プログラムでは「学ぶ意義」を伝えてほしい。勉強が実際の仕事につながっていることを知ると学習意欲向上につながる。インターンシップ実施に対し、学校側はこの点を重視している。

○学校は、地域、社会との連携が重要であり、今後は官民連携をさらに繋げていきたい。

○まだ知らない世界を生徒たちに伝えること、知るきっかけをつくることが重要。

5 ヒアリング調査結果

下表の通り、ヒアリング調査を行った。

| | | |
|-------------------------|---------------|-----|
| 2021年12月24日 10:00~11:00 | 東京都教育庁 | 訪問 |
| 2021年12月24日 13:00~14:00 | 東京都立町田工業高等学校 | 訪問 |
| 2022年1月27日 14:00~15:00 | 沖縄県立具志川商業高等学校 | web |
| 2022年1月29日 11:00~11:40 | 観光系大学 | web |

5.1 観光系大学ヒアリング

1. 高大連携の取り組みについて（全学）

○連携に取り組まれた経緯

高大連携の取組みは、直接的には中教審の答申（中教審第177号）で、中等教育から中等教育への連携や高大接続という教育に一貫性が求められていることへの対応するものである。

○連携の初期段階

関係性の強い付属高校から高大連携をスタートさせた。現在複数の付属高校があり、付属高校からは推薦ということですとやってきた。高大連携により、進路のミスマッチの回避や高校から大学に必要な基礎学力（たとえば英語力の向上）や教育の質の向上をしている。

○連携の深化

高校から進学のための「大学グローバルコース」を作り、高校の授業に大学の講義を取り入れ、学部で必要な英語力の習得など高校1年から大学に入ってくるための勉強をしている。

2. 高大連携の取り組みについて（学部）

○学部独自の活動

現在、鹿児島県、山形県、鳥取県、岡山県の高校との連携を行っている。

○大学設置コースの学生と高校生の教育の場

大学には授業とインターンシップとで「学び」を融合させたコースがある。新型コロナウイルスの影響でインターンシップができなかったため、コースの学生と高校生が連携して取組み、その取組みを競うという教育実験を行った。出前講座的な1回での講義で終わるのではなく、オンラインを活用しながら継続的にコミュニケーションを取りながら課題解決に向かう実習を行った。

○高校の科目で最も多いのは総合学習の時間だと思う。

3. 高大連携を実現するために解決された課題

学部独自で行っている高大連携改革は、中教審の答申にある「真の連携」にまでは至っていない。そのため、今後、全学的取り組みのシステムー教育連携指定校制度などを導入するなどの改善が必要と感じている。

また、高大連携は大学の教員の負荷が大きいのも課題の一つである。

さらに、連携を行う上で避けては通れない問題がいわゆる「学力」問題。今後起こり得る学力のミスマッチをどう解決していくか、どう高校教育に食い込んでいけるかが課題になる。

4. 高大連携のビジョン

まず、連携の「量」だが、先ほども述べたとおり高大連携の教員の業務負荷が大きいため、拡大展開し全国に広めていくのかとなると現状では正直難しい。そのため、プログラムのパッケージ化を行い効率的な展開を目指している。

次に、連携の「質」だが、これはプログラムの充実を図っていこうとしている。

現状のプログラムは、高校のニーズに合わせて、大学が変えているという状態。教育効果測定はなかなか難しい。内容は、大学が出したい内容と高校生が受けたい内容に差が出てしまう。この部分も悩ましいところである。

5.2 東京都教育庁ヒアリング

○コンソーシアム設立の経緯

「工業高校、専門学校、企業等の連携におけるIT人材の育成に向けた検討委員会」
IT人材不足と、工業高校の人気低迷を回復させることが目的だった。将来的な人材不足の解消に向けて検討したところ、日本IBMより工業高校の3年間と専門学校の2年間の通算5年間のプログラムによりIT人材の育成が可能と提案があった。

IBMなどのIT企業が参加しアメリカで開始したIT人材育成の教育モデル（5年間）として【P-TECH】があり20カ国以上で200校、600社以上が参加してスタートしている。⇒ 町田工業高校にはそれをアレンジした【Tokyo P-TECH】を導入。

○コンソーシアムの運営

現在は、教育委員会が主体となり町田工業高校、日本工学院、日本IBMなどの企業複数社で構成するコンソーシアムで運営している。今後は都立の工業高校にて、同様の2つのコンソーシアムを検討しておりマッチングを検討しながら最終的に調整する。

○他分野（商業高校、農業高校）への横展開の可能性

文科省事業で検討されている高専連携事業で考えた場合、どのジャンルでも対応できると思う。特に商業高校は情報処理の授業があるので【Tokyo P-TECH】のようなプログラムが展開しやすいのではないかと。農業高校では東京では農家就農などは現実的ではないので、スマートアグリを含めた形であればと可能だと思う。

○中学生に対しての広報

中学生への情報発信の方法に関してはまだまだ改善の余地があると思っている。ただ、志望者は増加傾向にある。

○学習指導要領の親和性

専門学校と高校との打ち合わせで高校の学習指導要領の範囲で逸脱しないようにしてそこはしっかり線引きをした。高校として基本的なカリキュラムにプラスアルファで完結するようにして就職も可能にする。

○コンソーシアム構築の際、専門学校、企業、行政（東京都）の協定専門学校との協定は結びやすいが、企業は結びにくい場合がある。

○このような事業には、「主体的に取り組む教員」が重要になると思われる。また、この事業を通しての副産物として、生徒が保護者や高校の先生以外の大人と接することによるコミュニケーション能力の向上があげられる。

5.3 東京都立町田工業高校ヒアリング

○連携科目はどの領域（科目）の単位になのか

高校1年生は「工業技術基礎」2年生以降は「実習や課題研究」などの授業時間を活用している。どちらもTokyo P-TECH授業は、年間通して数時間授業となっており、全体に占める比率も数%程度である。

○現時点での連携学科生徒の進路希望はどうなっているか

P-TECH受講生約35名中、令和2年度は3名、令和3年度は9名が進学予定。

○連携専門学校に進学した卒業生は、別授業を受けているか

別授業を受けてはいない。放課後や週末等を利用し、別途授業を受けている状況である。

○連携する内容の中学校への広報

近隣の中学校へ年間1～2回の訪問で説明を実施。夏休み等を利用して自校でも実施。結果として町田工業高校を希望する中学生も増え、特に推薦入試での人気は高まってきた。

○連携する授業の評価方法

Tokyo P-TECHとしての評価はしていない。

○日本IBMと連携した4つの事業（パイロット事業）

- ① IT 講話 1年生（学年全生徒対象） 年4回程度
- ② 授業支援 2年生以上（Tokyo P-TECH受講生約70名が対象） 高校での授業に企業から講師を派遣してもらう
- ③ メンタリング 2年生以上（Tokyo P-TECH受講生約70名が対象） 社会人の先輩が、進路や勉強の相談に乗る
- ④ ジョブシャドウイング 2年生以上（Tokyo P-TECH受講生約70名が対象） 企業でメンターが普段している仕事の様子を見学

○今後の展開

都内2校の工業高校が同様のプログラムを導入する予定で動いている

5.4 沖縄県立具志川商業高校ヒアリング

●高校でプログラムとしてやってほしいこと

今年度はできていないが、昨年度までは月1回程度、グランドハンドリングや、ホテルなどの仕事についての授業などを1時間お願いしていた。今後もぜひそういったことを協力していただけないかと思っている。

●2年生との連携

職業人講話など進路に関する授業をお願いできないかと思っている。生徒の進路決定につながるような、幅広い知識を身につけ、情報収集できたら助かる。一つの業界だけでなく幅広い業界のお話しをお伺いしたい。

●キャリア教育

ジョブシャドウイングなどもお願いしたい。

●リゾート観光科のインターンシップ

沖縄専各が企業マッチングしてくれているが、リゾート観光科の生徒であればリゾートホテルのインターンシップなど、協力いただけたら助かる。

●高専連携で取り組む授業時間と科目について

今年まで1年生は「観光基礎」という具志川商業高校独自の科目の中で実施していた。次年度、学習指導要領が変わるとこの観光基礎という科目がなくなる。他の商業高校と同じように情報処理や簿記、ビジネス基礎の授業が1年生から入ってくるので、観光基礎はなくなってしまう。よって、連携するのであれば2年生からお願いしたい

新学習指導要領では「観光ビジネス」という科目ができるが、今は教科書ができていないということもあり、具志川商業高校では3年生で取り入れる。今後、どのようにしてやっていこうかなというところである。

●連携する検定について（観光業を目指す生徒たち向け）

観光分野の検定で連携するイメージがない。授業時間にしても月に1回ということであれば可能と思うが、連携授業を継続して、1か月に4、5時間とるということは難しい。

●インターンシップについて

企業の人事採用担当を具志川商業高校に招いての講話は、毎年やっている。卒業生が就職した会社の話や仕事の話やを毎年、5、6人に来てもらい、実施している。また、企業人を年間2名ほど呼びして、リゾート観光科の授業の1つとしてやっている。

●高校側でやってほしいこと（総括）

インターンシップ、ジョブシャドウイングの機会がもう少しあればありがたい。1つは職業観を持たせること、そして、就職しての定着率、情報不足で短期間でやめてしまうということの防止につながる。いいところも悪いところもしっかり理解してもらおう。その生の情報というものが必要である。

高校卒業後、就職する学生の定着率、続けて働いているかどうかの追跡調査みたいなものはしていない。ただ、2年くらいして辞めたという話は聞く。学校に来て、相談に乗ってほしいという卒業生もいて、卒業後の相談ニーズはある。

●2年生で1年間に授業時間としてどれくらい取ることが可能か

今年度までは1年生で年間8時間。2年生も年間8時間くらいになるだろう。

6 ヒアリング調査結果の検討

第1回連携プログラム開発協議会でヒアリング結果について検討した。

- ・空港やウェディング関係のジョブシャドウイングは生徒も喜ぶと思う。今後ともお願いしたい。

- ・ジョブシャドウイングの受け入れ実績は当社ではない。小学生を対象に空港の業務を見る見学会の実績がある。ジョブシャドウイングの前例はないがインターンシップより受け入れしやすいと思う。平等にすべての学生を受け入れるには良いと個人的に感じる。

- ・ジョブシャドウイングとしての受け入れ実績はないが、就業体験等は積極的に受け入れている。小学生から高校生まで問い合わせがあった時に現場に行ってもらい担当者からの説明、企業、仕事内容を見てもらうといったことをしているので、結果的にジョブシャドウイングに近い形になっているのではと思う。

- ・ジョブシャドウイングは高校生や大学生を対象に積極的に実施。例えばフロントにいきなり立って窓口業務を行うのは難しい。「今日は見ていて」と伝え、ここで何をしているか、どのように接客しているか感じてもらい、メモを取らせている。あえて「シャドウイング中」といったバッチを付け、お客様にもわかるようにしている。

- ・営業職などホテルの裏側をなかなか見ることはないので、あえて座ってもらい電話を取る姿などを見学する取り組みを昨年度から実施。コロナの影響などもあったので、今までと違う方法でインターンシップを取り組み始めたところ。

- ・高橋委員には高度人材育成のプログラムを通じて、夏休みにインターンシップを実施してもらった。今年度も実施する予定。この事業は従来のインターンシップとは別に普通高校などを含めた全高校生向けに行う予定（参加人数を限定）だが、実地での実習に加え、コロナの影響でリアルでの実施が難しい中オンラインでの実施や、オンラインミーティングと3時間から半日のジョブシャドウ等を組み合わせたハイブリットで実施した経緯がある。

- ・これからインターンシップなど体験型の活動の在り方が大きく変わるのではないかとの実感がある。仕事の在り方が変わる中で、いつまでもリアルな方法ではないと思うが、高校生にとっては実際に見る、肌で感じることに大きな意義があると思う。保護者や先生以外の大人と関わる感覚、挨拶や意見などコミュニケーションの取り方や「働くこと」などを学ぶ機会が大切だと思う。事業実施によるデータ等を分析しながらインターンシップの在り方について、現在検討しているところである。

7 令和4年度プログラム開発方針の検討

・多くの業種、学校の方に協力して頂きながら生徒の職業観育成、進学・就職といった進路決定まで手伝って頂けると助かる。

・沖縄全体で観光客をもてなすことや業界・業種の壁がどこまで取り払えるかが重要かと思う。

・高校には指導要領があるので、カリキュラムをさわることは難しいと思うが航空業界やブライダル業界など観光に携わる業界が業種に関わらず、若い世代にどこまでできるか、もてなすことができるかだと思う。

・例えば旅行業に興味のある子たちに対しては、関係する施設の割引。ホテルに興味のある子に対しては特別な割引料金などをし、魅力をもっと知ってもらうきっかけが重要。

・専門学校に関していうと今までは何となく運営できていたが、さらに専門性が求められると思うので教職員がより業界と密接にし、ブラッシュアップ等の研修を含めもっと勉強していかないといけない。そうでないと高校現場から求められるニーズの授業ができなくなってしまう課題も出ると思う。

・5年間の学びに対し、どうモチベーションを維持していくか。その対応として検定等もあると思うが、沖縄の観光施設等をもっと知ってもらい、仕事を始めたとき自身の体験を元に観光客に対して生きた情報を伝えられるよう、若い子たちに対し観光施設やホテル・空港を利用してもらい施策も面白いと思う。

・ホテルというコンシェルジュのようなイメージ。自身もホテル勤務時代、実際に施設等を利用させてもらった。生きた情報を提供するためには利用してもらわなくてはならない。業界・業種の壁と取り払うことがキーになると思う。

・ジョブシャドウイングがとっても入りやすいと思った。インターンシップは業種や業態によって受け入れがしにくい期間がある。専門学校としては参加前の事前学習や事後の振り返りで職業教育を踏まえた連携ができるのではないかと考えた。

・事前学習等を踏まえての知識・技能の習得、実際の現場で得た情報を現場のスタッフと情報交換できることで表現できるのではないかと考えた。振り返りの部分では、現場で求められる人材、方針等に触れられると、社会人の仕事に対する思い、従事しているかといった点も学べる機会にもなると思う。また高校生にとって学ぶ態度などに対してブラッシュアップにつながると思う。そういった点で専門学校は良い連携ができるのではないかと考えた。

・具志川商業で何度か職業講話を行ったことがある。語学系授業担当として、語学は人と接するあらゆる業種に関係していることを伝えている。沖縄は観光立県なのでタクシードライバーやコンビニ店員でもあらゆるところでコミュニケーション力の向上を通し、観光業を支えているということ話をしている。

・高校生は漠然としてリゾート、観光といった学科に入学してくる。業種までは絞れていない子がたくさんいると思う。小学生向けにはジョブシャドウイングやキッズニアといった施設で職業体験できる機会がある。高校生にも専門学校へ行く前に業種を知るこのような体験ができ

ればと考えているが、この高専連携の取り組みがよい機会になるのではと思う。

- ・企業との連携が一番大事になると思う。プライダルの分野で考えると、コロナ禍の影響で結婚式や披露宴が減少している状況から職業に触れる中学生・高校生が減っている。言葉ではなかなか伝わらない仕事のやりがい、仕事の種類など体験を通して知ってもらいプライダル業界や

それ以外の興味を持っていなかった業界にも行ってみたいと思うことをしていかないと、観光業界の人材が不足していってしまうと考えている。

- ・職業を知ってもらえるインターンシップ、ジョブシャドウイングをうまく取り入れながら中学、高校生に体験してもらえり組みはやっていかないといけないと思う。

- ・観光業を学びたいと専門学校へ入学してきたら、地元の人が沖縄の良さを実感できる機会が少ないので、沖縄の良さをプラスした知識を知ることで新しい価値観を知る人材育成や業界とのミスマッチを防ぐことで長く業界に貢献してもらえりと思う。企業と連携した体験学習を進めていければと思う。

- ・今までのインターンシップより掘り下げることができることはないかと考えた。例えば、テーマを絞って学生と一緒に商品開発やマーケティングの実施、実際に商品を販売するといった一貫したインターンシップができそうだと思う。

- ・例えば掛け合わせる事例として、介護を必要としている方に向けて、介護の支援を行いながら旅行に同行できるなど介護の知識を加え、ターゲットを絞った商品の開発を手掛けるなどインターンシップを掘り下げできないかイメージを持った。

- ・プライダルの採用に携わる立場にはなるが、コロナ禍によりプライダルに触れる機会が減っている。観光業に対するイメージが大打撃を受けている。両親など周りの大人によるマイナスのイメージが中高校生に影響することがあると最近聞く。インターンシップに行ける機会が無い中、ウェブなどの情報でイメージが固まりやすくなっていると思う。

- ・企業の意見として、自分の目で見て判断することが大事であることを伝えてほしい。短期的にはなるが、自分の学校の卒業生の働く姿、活躍している姿を見られると少なからず影響を受けりと思う。先輩の働く姿を見せる機会を増やしたり、卒業生が働く企業の担当者が講話を行うなどリアルな現場の声を届けられる機会がもっとあってもよいと感じている。

- ・安定を求める学生も増えている印象はある。スケールが大きくなってしまいが観光業、自分たちの企業が県や観光業にどのような影響を与えているといった可能性を伝えられる授業があるといいと思う。

- ・企業側の視点で考えると、漠然としていても観光業界に関わりたいという気持ちのある学生は、沖縄が好き、多くの人とコミュニケーションをとることが好き、海外に憧れがあるといった何かしらの共通点があると思う。興味を持つ部分、例えば沖縄の文化を改めて知り、自分の視野を広げ経験を積むことによって感受性を高めてもらえり、企業に就職することがゴールではなく、そこから感じて成長していくことを知ることが学生にとっては大事。プログラムの中でたくさんの体験の場をつくりたいと考えている。

- ・仕事を通じて初めて知ること、業界の苦勞、失敗など生の声を伝えることが大事と思う。実

際の空港の雰囲気、定時運行を守る緊張感など、見て肌で感じないとわからない部分もある。学生にとって職業講話などの後にジョブシャドウイングとつなげていくことに意味があり、やはりこの業種を目指したいと気持ちにもなると思う。

- 生徒が体験活動等を通じて学ぶ価値が大きい。知識を得ても実際に体験しないと腑に落ちないので、どのように体験する機会を作るかが課題。インターンシップが実施できていない中、学校からは実施してほしいとの声が多い。現状としてできる状況でないのにこれに代わる方法を考えるなかであって、生徒にとって体験できる学びが大切であると痛感している。
- 学校の要望を聞きながらプログラムを作って頂きたい。インターンシップやジョブシャドウイングは事前、事後の指導が大切。なぜ学ぶのか、なぜ働くのかといった根本的な部分を抑えないと、生徒たちにはおちてこない。高校でも「働く意義」についてしっかりと指導していく必要があると思っている。
- 学習指導要領では、勤労観や職業観について説明がされていない。勤労観は日常生活で育成することができるが、職業観、職業理解は学校や地域などの協力を得ながら育成していく必要がある。業種の理解など1つの企業とっても会計や営業などいろいろな部署がある。それらの理解がまだ足りていないと感じることもあるので職業理解に力を入れてほしい。それらを踏まえると企業の協力は非常に大切で、それをつなぐ専門学校の力が一体的になったプログラムができれば、よい方向で人材が育成できると考えている。(もちろん、それ以外にも、検定やマナー指導など様々に関わってもらう必要があると思いますが。)

資 料

| | |
|---------|--|
| 事業所名 | ヒアリング内容の特定を防止する観点から不掲載 |
| 事業所住所 | |
| 調査日時 | 2021年11月29日 11:00~11:40 |
| 調査方法 | Web |
| インタビュー | 学部 教務課勤務 |
| インタビュアー | 学校法人KBC学園 仲宗根、(株)穴吹カレッジサービス 広原 |
| 記録 | (株)穴吹カレッジサービス 中村 |
| 進行 | 事前にインタビューシートを送付し、頂いた回答(※資料参照)を基に仲宗根が進行。 |
| 事業所概要 | 日本で初めて観光学を専門とした履修体制を整え、以降、我が国の観光学をリードし続けている大学である。また、特に観光分野における高大連携実績も高い |
| 内 容 | <p>1.高大連携の取り組みについて(全学)</p> <p>○連携に取り組みまれた経緯</p> <p>高大連携の取組みは、直接的には中教審の答申(中教審第177号)で、中等教育から中等教育への連携や高大接続という教育に一貫性が求められることへの対応するものである。</p> <p>○連携の初期段階</p> <p>関係性の強い付属高校から高大連携をスタートさせた。現在複数の付属高校があり、付属高校からは推薦ということですとやってきた。高大連携により、進路のミスマッチの回避や高校から大学に必要な基礎学力(たとえば英語力の向上)や教育の質の向上をしている。</p> <p>○連携の深化</p> <p>付属高校の連携がある程度形になると、入試改革として付属校以外の高校との連携をスタート。具体的には高校から進学のための「大学グローバルコース」を作った。このコースは大学進学専門コース。2017年度の募集から40名(1クラス)でスタートし、今は80名(2クラス)になっている。高校の授業に大学の講義を取り入れ、学部で必要な英語力の習得など高校1年から大学に入ってくるための勉強をしている。</p> <p>2.高大連携の取り組みについて(学部)</p> <p>○学部独自の活動</p> <p>現在、鹿児島県、山形県、鳥取県、岡山県の高校との連携を行っている。観光系や国際系など実業系コースがある高校とは連携が組みやすい。</p> <p>○大学設置コースの学生と高校生の教育の場</p> <p>大学には授業とインターンシップとで「学び」を融合させたコースがあ</p> |

る。新型コロナウイルスの影響でインターンシップができなかったため、コースの学生と高校生が連携して取組み、その取組みを競うという教育実験を行った。連携には「大学生と高校生」、「大学教員と高校生」の連携がある。大学教員と高校生の連携はよくあると思うが、大学生と高校生の連携はあまり見られない。高校の先生も一部入ってもらい、連携していった。出前講座的な 1 回での講義で終わるのではなく、オンラインを活用しながら継続的にコミュニケーションを取りながら課題解決に向かう実習を行った。

【仲宗根質問】

プログラムを受けている高校生が高校のどの科目で受けているのか。

【回答】

高校ごとに異なるが、最も多いのは総合学習の時間だと思う。我々も総合学習としてプランを組んでいる。

3. 高大連携を実現するために解決された課題

全学的に取り組んでいる高大連携改革は順調に進み、大学ビジョンに沿った教育活動ができています。一方、学部独自で行っている高大連携改革は、一定以上の授業評価は見られるものの先の中教審の答申にある「真の連携」にまでは至っていない。そのため、今後、全学的取り組みのシステム—教育連携指定校制度などを導入するなどの改善が必要である。

また、高大連携は大学の教員の負荷が大きいのも課題の一つである。今後、大学経営の視点からもこの点は看過できない大きな課題となるだろう。

連携を行う上で避けては通れない問題がいわゆる「学力」問題。今後起こり得る学力のミスマッチをどう解決していくか、どう高校教育に食い込んでいけるかが課題になる。

4. 高大連携のビジョン

まず、連携の「量」だが、先ほども述べたとおり高大連携の教員の業務負荷が大きいので、拡大展開し全国に広めていくのかとなると現状では正直難しい。そのため、プログラムのパッケージ化を行い効率的な展開を目指している。

次に、連携の「質」だが、これはプログラムの充実を図っていかようとしている。現状は受注生産的なプログラムを提供しているため、提案型のプログラム開発を行っていく必要も感じている。また、今後、高校のニーズ（対象科目・時間数・単位数・連携に対する温度（期待）感など）を把握しより充実した教育プログラムにしていきたい。

現状では、総合学習でも毎週 1 時間。そのうち何回大学側の授業に割け

| |
|--|
| <p>るか、それは高校で個別になり、パッケージでの高大接続は難しい。連携している高校に目を向けると、すでにカリキュラムに組み込まれているので連携の縮小も難しい。</p> <p>【広原質問】 特に知りたい高校のニーズは何か</p> <p>【回答】 総合学習でやっているとは思いますが、我々が高校のカリキュラムを熟知しているわけではない。高校でどういう位置づけになっているか、また進路指導に役立っているのかなどを知りたい。我々も高校のニーズの聞き取りをしているが、本音が出てきにくい。</p> <p>【広原質問】 高大連携の教育の目標と評価について</p> <p>【回答】 大学の教員側は高校の先生と相談してテーマを決めていくので、大学の教員は専門外でも対応している。高校側の何を学んでどういう学習効果につなげるかに大学教員が詳しくないので、高校のニーズに合わせて、大学が変えているという状態。</p> <p>教育効果測定に関しては講義アンケート等をとっているが、高校生の書いてくるアンケートがどれほど参考になるかは疑問である。そのため、この問題はなかなか悩ましいところである。</p> <p>【広原質問】 パッケージのラインナップを知りたい</p> <p>【回答】 今は学部には 2 コースだが以前は複数のコースがあった。ホスピタリティ系、エアライン系、ツーリズム、観光政策、そして、働きながら学ぶコース。それぞれが 1 つずつパッケージを持っているが、高校の現場で使えるのは全部ではない。エアライン系だと「CA になりたい」で入ってくるが、実際は CA だけを育成するのではなく、航空政策なども入ってくる。大学が出したい内容と高校生が受けたい内容に差が出てしまう。この部分も悩ましいところである。</p> |
|--|

| | |
|--|---|
| 2021 年度「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」 「沖縄観光系・動物系分野における有機的連携プログラム」 ヒアリング調査 レポート | |
| 日 時 | 2021 年 12 月 24 日（金）10:00～11:00 |
| 場 所 | 東京都教育庁 東京都新宿区西新宿 2-8-1 （東京都庁第 2 本庁舎 15 階北側） |
| 参加者 | 【東京都教育庁 都立学校教育部高等学校教育課】 ・多田 緑様（課長代理） 【沖縄県教育庁 県立学校教育課】 2 名 ・金城 盛秀様（産業教育班指導主事） ・平良 みどり様（指導主事） 【日経教育グループ 専門学校事業部】 ・長濱 克実様（事業部長） 【学校法人智晴学園 専門学校琉球リハビリテーション学院】 ・福田 聡史様（教務管理部長代理） 【学校法人 KBC 学園】 2 名 ・仲宗根 真 ・伊禮 嘉本 |
| 内 容 | 東京都教育庁 都立学校教育部高等学校教育課 課長代理 多田 緑 様より 「工業高校、専門学校、企業等の連携における IT 人材の育成に向けた検討委員会」 設置の主な目的は 2030 年に約 79 万人の IT 人材が不足するとの推計による。 併せて、工業高校の人気低迷を回復させることも目的の一つである。 将来的な人材不足の解消に向けて検討したところ、日本 IBM より工業高校の 3 年間と専門学校の 2 年間の通算 5 年間のプログラムにより IT 人材の育成が可能と提案があった。 ※ IBM などの IT 企業が参加しアメリカで開始した IT 人材育成の教育モデル（5 年間）として【P-TECH】があり 20 ヶ国以上で 200 校、600 社以上が参加してスタートしている。⇒ 町田工業高校にはそれをアレンジした【Tokyo P-TECH】を導入。 Q. コンソーシアムはどのように予定しているのか？ A. 現在は、教育委員会が主体となり町田工業高校、日本工学院、日本 IBM などの企業複数社で構成するコンソーシアムで運営している。今後は都立の工業高校にて、同様の 2 つのコンソーシアムを検討しておりマッ |

チングを検討しながら最終的に調整する。神奈川県その他、茨城県でも【P-TECH】が検討されており、茨城県では信用金庫を核として地元のIT企業に依頼をするような形式で連携支援を行う予定と聞いている。

Q. 【Tokyo P-TECH】は工業高校の生徒募集課題の解消、日本IBMの人材確保など利点が多いが、今後は他分野（商業高校、農業高校）への横展開はいかがでしょうか？

A. 文科省事業で検討されている高専連携事業で考えた場合、どのジャンルでも対応できると思う。特に商業高校は情報処理の授業があるので【Tokyo P-TECH】のようなプログラムが展開しやすいのではないかと。農業高校では東京では農家就農などは現実的ではないので、スマートアグリを含めた形であればと可能だと思う。

Q. 【Tokyo P-TECH】は工業高校生にとって素晴らしいプログラムですが、中学生に対して高校進学又は将来の仕事としてのキャリア教育的な将来像をどのように伝えていらっしゃいますか？（高校の生徒募集に関連）

A. 【Tokyo P-TECH】の中学生への告知はかなり難しい課題であり、現在も解決に向け模索中です。工業高校への進学希望者確保については、中学生の人口が減少の一途をたどっていること、更に町田工業高校は神奈川県に近いが都立高校であるがゆえ都民しか入学できないなどの特殊な要因もあり苦戦しているのが現状。

中学生への情報発信の方法に関してはまだまだ改善の余地があると思っている。

Q. 【Tokyo P-TECH】と学習指導要領の親和性はいかがでしょうか？（就職も視野に）

A. 専門学校と高校との打ち合わせで高校の学習指導要領の範囲で逸脱しないようにしてそこはしっかり線引きをした。高校として基本的なカリキュラムにプラスアルファで完結するようにして就職も可能にする。

【Tokyo P-TECH】を選択した生徒へは専門学校への入学を誘導はできないが、ワンランクアップ（IT企業への即戦力としての就職）したい場合などには、専門学校への入学を検討してもらうようなイメージである。

Q. コンソーシアム構築の際、専門学校、企業、行政（東京都）の協定はどうなっていますか？

| | |
|--|---|
| | <p>A. 専門学校との協定は結びやすいが、企業によっては正式な文書（押印）に抵抗があって結びにくい場合がある。その際には「入会届」や「その取組みに参加します」といった簡易な方法を選択できる方法も考えている。取組みを広く知って頂くためには、出来ればプレスを利用して公表したほうが良いと考え、なるべく正式な枠組みが謳える方がよいと思う。</p> <p>【その他】</p> <p>この事業でも人、モノ、金が大事になるが、今後導入する学校が増えた場合には、最終的に「主体的に取組む人」が重要になると思われる。町田工業高校の寺島 和彦先生は 15 年間町田工業高校で取組んでいる。</p> <p>この事業を通しての副産物として、生徒が保護者や高校の先生以外の大人と接することによるコミュニケーション能力の向上があげられる。</p> <p>高校生にとって、情報がないことで不安に思っていた業界への就職などについては、実際に現場で働く方と接することにより心理的なハードルは下がったように感じる。</p> <p>今後実際に就職面接などを受けるときには、有利に働くのではないか。</p> |
|--|---|

| 2021 年度「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」 「沖縄観光系・動物系分野における有機的連携プログラム」 ヒアリング調査 レポート | |
|--|---|
| 日 時 | 2021 年 12 月 23 日（木） 13:00～14:00 |
| 場 所 | 東京都町田市忠生 1-20-2 東京都立町田工業高校 |
| 参加者 | <p>【東京都立 町田工業高校】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・寺島 和彦様（総合情報科長 主幹教諭） <p>【沖縄県教育庁 県立学校教育課】 2 名</p> <ul style="list-style-type: none"> ・金城 盛秀様（産業教育班指導主事） ・平良 みどり様（指導主事） <p>【日経教育グループ 専門学校事業部】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・長濱 克実様（事業部長） <p>【学校法人智晴学園 専門学校琉球リハビリテーション学院】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・福田 聡史様（教務管理部長代理） <p>【学校法人 KBC 学園】 2 名</p> <ul style="list-style-type: none"> ・仲宗根 真 ・伊禮 嘉本 |
| 内 容 | <p>Q1. 連携科目は、令和4年度からの新指導要領の枠組みではどの領域（科目）の単位互換になるのか。</p> <p>A1. 高校1年生は「工業技術基礎」2年生以降は「実習や課題研究」などの授業時間を活用している。どちらも Tokyo P-TECH 授業は、年間通して数時間授業となっており、全体に占める比率も数%程度である。</p> <p>Q2. 現時点での連携学科生徒の進路希望はどうなっているか</p> <p>A2. Tokyo P-TECH 導入前よりは進学率が高まり、特に連携する専門学校(日本工学院)への進学者が増加している(Tokyo P-TECH 受講生約35名中、令和2年度は3名が進学、令和3年度は9名が進学予定) (補足)</p> <p>入学時は総合情報科(1学年定員175名)として括り募集のため、厳密には Tokyo P-TECH を受講する生徒は、2年生以降に情報テクノロジー系列を選択した者のみとなる。Tokyo P-TECH 受講人数について、現3年生までは1クラス分約35名であるが、系列の改編によって現2年生からは2クラス分約70名が受講している。</p> <p>(関連質問)</p> <p>Q2-1. 連携する専門学校に進学した卒業生は、他の高校出身者とは別の授業を受けて</p> |

| | |
|--|--|
| | <p>いるのか</p> <p>A2-1. 人数的な関係もあり別授業を受けてはいない。放課後や週末等を利用し、別途授業を受けている状況である。</p> <p>Q3. 連携する内容の中学校への広報はどのようになっているか（学校説明会・中学校訪問等）</p> <p>A3. 近隣の中学校へ年間1～2回の訪問で説明を実施。夏休み等を利用して自校でも実施（年間5回程度実施）学校説明会には保護者も含めて各回60～100名が参加する。最近はTokyo P-TECHを強く推している事もあり、興味を示してくれる中学生も増加傾向にある。結果として町田工業高校を希望する中学生も増え、特に推薦入試での人気は高まってきている。</p> <p>Q4. 連携する授業の評価方法はどのようにされているのか</p> <p>A4. 通常の高校の授業としての評価のみであり、Tokyo P-TECHとしての評価はしていない。</p> <p>Q5. 「単位認定」と「検定試験」について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・検定試験合格と単位認定の関係（不合格の場合など） ・検定試験対策の時間をどのように確保しているのか。 <p>A5. Tokyo P-TECHとしての試験や単位認定はしていない。</p> <p>その他のヒアリング内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本IBMと連携した4つの事業（パイロット事業） <p>IT 講話 1年生（学年全生徒対象） 年4回程度</p> <p>授業支援 2年生以上（Tokyo P-TECH 受講生約70名が対象）高校での授業に企業から講師を派遣してもらう</p> <p>メンタリング 2年生以上（Tokyo P-TECH 受講生約70名が対象）社会人の先輩が、進路や勉強の相談に乗る</p> <p>ジョブシャドウイング 2年生以上（Tokyo P-TECH 受講生約70名が対象）企業でメンターが普段している仕事の様子を見学</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今後の展開 <p>都内2校の工業高校が同様のプログラムを導入する予定で動いている</p> |
|--|--|

| | |
|---|---|
| <p>2021 年度「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」 「沖縄観光系・動物系分野における有機的連携プログラム」 ヒアリング調査 レポート</p> | |
| 日 時 | 2022 年 1 月 27 日（水）14:00～15:00 |
| 場 所 | 新型コロナウイルス感染拡大状況下における、まん延防止等重点措置のためオンラインにて実施 |
| 参加者 | <p>沖縄県立具志川商業高校 リゾート観光科 宮城 仁 先生 学校法人 KBC 学園 仲宗根 真 (記録) 株式会社穴吹カレッジサービス 中村 多恵</p> |
| 内 容 | <p>●高校でプログラムとしてやってほしいこと (仲宗根) プログラムとしてやってほしいことを具体的にお伺いしたい。 (宮城先生) 今年度はできていないが、昨年度までは月 1 回程度、グランドハンドリングや、ホテルなどの仕事についての授業などを 1 時間お願いしていた。今後もぜひそういったことを協力していただけないかと思っている。 (仲宗根) 対象は何年生か？ (宮城先生) 昨年や一昨年、3 年前からやっていたのは 1 年生。ただ、次年度から学習指導要領が変わる。できれば 2 年生を対象にできないかと思っている。 (仲宗根) 2 年生であるとういうことが連携できるか？ (宮城先生) 職業人講話など進路に関する授業をお願いできないかと思っている。 (仲宗根) これまでは観光をメインでやっているが、デザインや動物など、観光以外にもさせていただいていたと思うが、メインは観光としながら、それ以外の分野もやるというのがご希望だろうか。 (宮城先生) メインは観光であるが、分野は広く実施したい。 (仲宗根) 授業としてはキャリア教育、進路決定という位置づけだろうか？ (宮城先生) 生徒の進路決定につながるような、幅広い知識を身につけ、情報収集でき</p> |

| | |
|--|--|
| | <p>たら助かる。</p> <p>(仲宗根)</p> <p>当学園であれば、観光系やデザイン系、美容系もあったと思うが、医療系などで講師を探しているというのはあるか。</p> <p>(宮城先生)</p> <p>そういった幅広い講師もあればお願いしたい。</p> <p>(仲宗根)</p> <p>生徒のキャリア教育や進路決定のために高校でもインターンシップに力を入れて取り組んでいると思う。専門学校ではインターンシップ前のマネー講習や業界特有のもの、例えば、航空業界であればその業界特有の事前学習をしてインターンシップに臨んでもらっている。そういった事前研修を高校でやることは可能性としてあるのか。</p> <p>(宮城先生)</p> <p>ジョブシャドウイングに近いと思うが、ぜひお願いしたい。</p> <p>(仲宗根)</p> <p>12月に東京の町田工業高校に視察に行った。職場で働く姿を見るジョブシャドウイングをしたり、一部はインターンシップをしたりしているそうだが、とてもいいと言っていた。貴校ではジョブシャドウイングのようなことは現在やっているのか。</p> <p>(宮城先生)</p> <p>リゾート観光科に限らず、どのコースも普通のインターンシップはしているが、ジョブシャドウイングはやっていない。観光系だけではなく、保育園なども行ったりしており、観光業に限定して行っていない。生徒にインターンシップ先の希望を聞き、なるべく第一希望になるようにしているが、人気のある分野は申込が殺到するので、第二希望や第三希望にしてもらうこともある。</p> <p>(仲宗根)</p> <p>このあたりもお手伝いさせていただける部分となるのではないか。</p> <p>(宮城先生)</p> <p>インターンシップ時には沖縄専各が企業マッチングしてくれているが、リゾート観光科の生徒であればリゾートホテルのインターンシップなど、協力いただけたら助かる。</p> <p>(仲宗根)</p> <p>観光業について、今はコロナで苦戦しているが、国内の観光客、海外の観光客も一千万人を受け入れていこうという中で、事業所(ホテル)は増えてきており、人手不足になっている。ホテルにお客として行く機会はあっ</p> |
|--|--|

ても、働くということはない。ぜひインターンシップ等を活用してホテルの中を見てほしいという声も事業所から聞かれる。高校の先生が個々のホテルにインターンシップが可能かどうかを聞いたり、お願いしたりするのは難しいと思うので、当学園の就職担当が受入れの窓口になり、高校生のインターンシップ受入れについてホテルにお伺いしていくことは可能である。

(宮城先生)

できるのであればぜひお願いしたい。

●高連携で取り組む授業時間と科目について

(仲宗根)

科目として、どの科目で取り組むことになるのか。

(宮城先生)

今年まで1年生は「観光基礎」という具志川商業高校独自の科目の中で実施していた。次年度、学習指導要領が変わるとこの観光基礎という科目がなくなる。他の商業高校と同じように情報処理や簿記、ビジネス基礎の授業が1年生から入ってくるので、観光基礎はなくなってしまふ。よって、連携するのであれば2年生からお願いしたい。

新学習指導要領では「観光ビジネス」という科目ができるが、今は教科書ができていないということもあり、具志川商業高校では3年生で取り入れる。今後、どのようにしてやっていこうかなというところである。

(仲宗根)

2年生向けで、キャリア教育や進路についていろいろ考えることができるというのが高校の現場としてご希望ということだろうか。

(宮城先生)

そういうことになる。

●連携する検定について（観光業を目指す生徒たち向け）

(仲宗根)

高専連携プログラムの中で、高校と専門学校の5年間でステップアップしていくには「検定」ということを1つの柱としている。例えば高校で3級、2級、専門学校で1級といった形で連携できないかと思っているが、検定ということで何かイメージしているものはあるか。

(宮城先生)

正直、観光分野の検定で連携するイメージがない。具体的に観光系であればどのような検定があるのか。

| | |
|--|--|
| | <p>(仲宗根)</p> <p>秘書検定、サービス接遇検定があり、具志川商業高校でもこれらにチャレンジしているのであれば検定対策で連携もできるのではと思っている。または、検定を独自に作って連携ということもできるのではと考えている。</p> <p>(宮城先生)</p> <p>検定対策をどの授業で扱っていくかが今は浮かばないので、ここは宿題となる。</p> <p>(仲宗根)</p> <p>町田工業高校ではコンピュータを扱う学科が専門学校や企業（IBM）と連携しているが、ジョブシャドウイングなどが連携のメインとなっていて、実際のコンピュータの勉強は専門学校に入ってからになっているとのことである。理由は年間で特別授業は数時間しかとれず、専門的なことをするには時間が全然足りないとの印象を受けたが、御校の場合はどうか。</p> <p>(宮城先生)</p> <p>月に 1 回ということであれば可能と思うが、連携授業を継続して、1 か月に4、5時間とるということは難しい。</p> <p>●インターンシップについて</p> <p>(仲宗根)</p> <p>企業と高校を結びつける。企業の人事採用担当を具志川商業高校に招いて、こういう人を募集しているということを伝えたり、観光系の専門学校や具志川商業高校の卒業生が今どんな仕事をしているかといったことを伝えたりというのはいかがだろうか。</p> <p>(宮城先生)</p> <p>それは高校でも毎年やっている。卒業生が就職した会社の話や仕事の話を毎年、5、6 人に来てもらい、実施している。</p> <p>(仲宗根)</p> <p>企業人が高校生に話をする機会はあるのか？</p> <p>(宮城先生)</p> <p>リゾート観光科では年間 2 名ほど呼び出して、話をしてもらっている。授業内で、進路指導とは別に、リゾート観光科の授業の 1 つとしてやっている。採用についてではなく、仕事内容や観光業界で働く先輩としてどんな高校生活を送ってきたかなどをメインで話してもらっている。</p> <p>●高校側でやってほしいこと（総括）</p> <p>(宮城先生)</p> |
|--|--|

インターンシップ、ジョブシャドウイングの機会がもう少しあればありがたい。

1つは職業観を持たせること、そして、就職しての定着率、情報不足で短期間でやめてしまうということの防止につながる。いいところも悪いところもしっかり理解してもらう。その生の情報というものが必要である。

高校卒業後、就職する学生の定着率、続けて働いているかどうかの追跡調査みたいなものはしていない。ただ、2年くらいして辞めたという話は聞く。学校に来て、相談に乗ってほしいという卒業生もいて、卒業後の相談ニーズはある。

●2年生で1年間に授業時間としてどれくらい取ることが可能か
(宮城先生)

今年度までは1年生で年間8時間。2年生も年間8時間くらいになるだろう。そうになると、継続的に検定対策ということは実際難しいということになる。

議事録

| | |
|--|--|
| <p>文部科学省事業 令和3年度「専修学校による地域産業中核人材養成事業」 第1回 プログラム検討委員会 議事録</p> | |
| 開催日時 | 2021年 11月10日(水) 15:00~17:00 |
| 会場並びに 開催方法 | インターナショナルリゾートカレッジ (那覇市金城5-8-6) 一部委員はZOOM利用によるリモート方式にて参加(立石委員、高橋委員) |
| 出席者 | <p>(プログラム検討委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・沖縄県教育庁 県立学校教育課 指導主事 伊波 貴文 ・沖縄県立具志川商業高等学校 教諭 宮城 仁 ・学校法人 静岡理工科大学 静岡インターナショナル・エア・リゾート 専門学校 教務課長代理 立石 公平 ・学校法人KBC学園 インターナショナルリゾートカレッジ 教務部長 近藤 賢宏、教務課長 新里 玲子 就職課主任 細谷 麻衣 ・株式会社国際旅行社 取締役総務部長 山城 秀康 ・タピック沖縄株式会社 ユインチホテル南城 管理部 戦略人事 課長 高橋 俊博 ・沖縄ワタベウェディング株式会社 人事総務グループ 人材開発 チーム リーダー 新里 麻未子 ・JAL スカイエアポート沖縄株式会社 地域事業推進室 スーパーバイザー 川北 奈津子 ・学校法人KBC学園 学園本部 地域創生室 アドバイザー 仲宗根 真 ・学校法人KBC学園 学園本部 経営企画部 進路相談課 課長 兼 就職支援担当 喜納 政一 <p>(教材説明)</p> <p>株式会社穴吹カレッジサービス 教育事業部 岡山営業所 主任 広原 敬幸</p> <p>(議事録作成)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校法人KBC学園 学園本部 地域創生室 東 知範 |
| 議 題 | <p>議 事</p> <p>議題1 令和3年度事業計画説明</p> <p>議題2 令和3年度実施取り組み説明</p> |
| 配布資料 | <p>配布資料</p> <p>資料① 令和3年度事業計画書</p> |

| | |
|------|--|
| | 資料② プログラム検討委員名簿 |
| 会議概要 | 仲宗根よりスケジュール、配布資料の確認後、近藤が挨拶。各委員より自己紹介を賜る。議題1で仲宗根より事業計画、内容について、広原より制作教材の内容を説明。説明後、各委員より質問・意見。休憩後、議題2に移り、仲宗根より今年度の取り組みを説明。各委員より質問・意見を承る。最後に仲宗根より今後の予定を説明し、近藤の挨拶にて終了。 |
| 内容 | <p>議題1：令和3年度事業計画説明</p> <ul style="list-style-type: none"> ・資料①を仲宗根が説明 <p>意見、質問等 (伊波委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習指導要領の中に「検定対策」という時間(授業)がない。 ・身につけたい(定着させたい)力として検定を関係づける(活用している) ・学習指導要領に沿って検定を導入している ・観光系の学科でも秘書検定などマナー系の検定も必要だと思うが、この検定は、他学科でも学習するため、「観光の学科」で学ぶにふさわしい内容の検定(資格)にすることが必要ではないか ・(学習指導要領の内容に近い)検定に関しては提案してもらうか、こちら(高校)から提案してもいいと思う。 ・「観光ビジネス」に関しては、この科目で学習する内容(指導項目)はあるため、全体像は掴むことができるが、現時点では、教科書は発行されていないため、どのような内容で授業を組み立てるか未定の部分がある。教科書は、令和4年度には発行されると思われる。 <p>県内の観光に関する学科において「観光ビジネス」の教科書を活用するのは、令和5年度以降となる(2年次を想定しているため)。 (宮城委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コロナ禍の影響で今まで企業や専門学校が行ってくれていた授業や講話が実施できていないので(高校側からすると)インターンシップなどの機会提供はありがたい。 <p>(川北委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・インターンシップは(コロナ禍の影響で)現在実施できていない ・以前は、専門学校生を対象に当社は接客業務とグランドハンドリング業務のインターンシップの受け入れをしていたが、インターンシップの経験で視野が広がったという感想が多い。 <p>高校生でも同じだと思うので、観光人財育成のため受け入れていきたいと考えている。しかし時期や受け入れ規模等は状況に応じてということにな</p> |

| | |
|--|--|
| | <p>る。</p> <p>(新里委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高校生のインターンシップは同様に実施できていない。自分自身も高校生の時にインターンシップに行ったことで学びが多かった。緊急事態後状況を見て受け入れたい。 ・ウェディング業界でも緊急事態宣言が延長してしまったことで、リゾートウェディングなどが影響を受けて状況が変わって待った部分もあるが、受け入れていきたい。 <p>(山城委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・旅行業界では専門学校からは頻繁に(インターンシップの)要請がある。大学なども状況によって受け入れている。 ・高校生の場合も業界全体でインターンシップを受け入れているが、(現在は)緊急事態宣言で受け入れ実施できていない。 ・中学生は職業体験といわれている。中学、高校、大学生と(学年の違いによって)学んでいる内容や知識のベース、プログラムの違いによって(インターンシップ)のとらえ方に差がある。 ・インターネットや携帯電話の普及によって(考え方やとらえ方が変化し)中学、高校生と「つかみどころ」や「ポイント」がずれ、わかりにくくなっている。高校生の(インターンシップ)に対し業界が積極的に(対応を)変えていく必要がある。 <p>(高橋委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高校生のインターンシップに対し、当社は積極的に受け入れる状況で行っている。 ・毎年30~40校の学校を受け入れているが、今年度は10校程度でほぼ出来ていない。 ・今年は高校のインターンシップが中止になってしまった。当社として協力している1つとして「高度人材育成」として(ホテル・観光業界への)意識の高い生徒に実施している。 ・SDGsの社会貢献の一環として実施。通常は体験型インターンシップで各部署をまわりますが、課題を与え、最後にプレゼンを実施してもらう。 ・小中学生は体験型で観光業を知ってもらう。お客様から「ありがとう」と感謝される喜びを最後に共感できる内容。高校生も基本は同じだが、大学生と同様に最後にプレゼンを行う内容にして(学んだこと)を身に着け、当社や観光業界で今後働いてもらえることを目指しているプログラムとして実施している。 <p>(立石委員)</p> |
|--|--|

| | |
|--|--|
| | <ul style="list-style-type: none"> ・静岡県のホテル・旅館業界は高校生のインターンシップ受け入れは積極的な印象を受ける。 ・専門学校生の受け入れ以上に「職業教育」としてホテル業を伝えている。 ・（高校現場では）興味があれば専門学校という選択肢があると進路指導を実施し（インターンシップを受けて入れている）企業も受け入れた生徒に専門学校を進学先として紹介してくれている。 ・高校、企業、専門学校という1つの流れができはじめている印象を受ける。 <p>議題2 令和3年度実施取り組み説明</p> <ul style="list-style-type: none"> ・資料①を使い仲宗根が今後の取り組み、広原氏がプログラム内容を説明。 <p>意見、質問等</p> <p>（伊波委員）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・商業科目のなかでインターンシップが授業の一環として入っているが（コロナ禍により）実施できていない。 ・今年度、新しい体制で実施を試みたが、夏休みからコロナが再拡大したため中止となった。インターンシップを予定していた90名のうち約40名の生徒が実施できなかった。 ・15年間インターンシップを実施しているが次年度から形式が変わる。今まで全校生徒に実施していたが、専門高校と、普通高校では取り組み方に違いがでてくる。 ・（まだ決定はしていないので）実施体制はどのような形になるか未定だが、学んだこと、身についたものが社会にどのようにつながっていくか実体験につながることを重視している。 ・プログラムでは「学ぶ意義」を伝えてほしい。勉強が実際の仕事につながっていることを知ると学習意欲向上につながる。インターンシップ実施に対し、学校側はこの点を重視している。 ・学校は、地域、社会との連携が重要であり、今後は官民連携をさらに繋げていきたい。 ・まだ知らない世界を生徒たちに伝えること、知るきっかけをつくることが重要。 ・その先につながるインターンシップを授業として実践して行いたい。この点を重視したプログラムにしてほしい。生徒にとって今まで知らないことを知ることによって学ぶ意欲につながる。インターンシップを担当している立 |
|--|--|

| |
|---|
| <p>場として、この点は伝えておきたい。</p> <p>委員会参加後の感想</p> <p>(伊波委員)</p> <ul style="list-style-type: none">・参加前は不安も多かったが、実際参加して自身の考えや意見を述べるべきという気持ちになった。・「専門教育の在り方」という専門学校関係者の会議がある。本日のような「連携」という意見が出ているので、この場でも行って頂きたい。 <p>(宮城委員)</p> <ul style="list-style-type: none">・参加したことで内容が見えてきた。具志川商業に入学してくる約40名のうち、小学生から観光業を考えている生徒は5~6名程度いるが、卒業時では1~2名になる。・3年間で体系立てた授業を実施しているが(就職に)結びつけることができている。生徒たちの「ミスマッチ」解決策につなげる方法を考えていきたい。 <p>(山城委員)</p> <ul style="list-style-type: none">・説明してもらった資料などを持ち帰り、事業計画、業界の流れなどを踏まえ、実習生の受け入れ体制を考えたい。・またこれらと業界の課題を精査し、次回の検討委員会までに準備したい。 <p>(新里委員)</p> <ul style="list-style-type: none">・今回参加して、ここでの議論が高校生の成長に繋がると感じた。意見として出ていた「この学びが社会でどう繋がるのか」という課題は、自身が高校時代に感じていた。この点を理解できていれば、高校生が卒業後、さらに意識の高い人材になると思う。・プログラム作成に対し、企業として意見を伝えていきたい。そしてプライダル、観光業界全体を盛り上げていくことに繋げたい。 <p>(川北委員)</p> <ul style="list-style-type: none">・参加したことで企業としてプログラム作成にどう参加できるか把握することができた。・現場では新入社員のアンマッチで早期離職という課題がある。この場で当社と参加者の課題を共有して意義のある内容にしたい。・また生徒に「体験」だけではなく、自主的に「考える」という点を企業として提供できればと思う。 <p>(立石委員)</p> <ul style="list-style-type: none">・とても大きなプロジェクトでワクワクする(興味が深い)内容だと感じ |
|---|

| | |
|--|--|
| | <p>た。</p> <ul style="list-style-type: none">・人材育成は観光業界にかかわらない。観光業界に関わる立場ではあるが、意見を出していきたい。・今後の予定について（仲宗根） 令和4年2月9日（水）15：00～17：00 第2回プログラム検討委員会 その他：本日の参加お礼（近藤） <p>以上 委員会を終了する。</p> |
|--|--|

| 文部科学省事業 令和3年度「専修学校による地域産業中核人材養成事業」 第2回 プログラム検討委員会 議事録 | |
|--|--|
| 開催日時 | 2022年 2月9日(水) 15:00~17:00 |
| 会場並びに 開催方法 | ZOOM 利用によるリモート方式にて開催 |
| 出席者 | <p>(プログラム検討委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・沖縄県教育庁 県立学校教育課 指導主事 伊波 貴文 ・沖縄県立具志川商業高等学校 教諭 宮城 仁 ・学校法人 静岡理工科大学 静岡インターナショナル・エア・リゾート 専門学校 教務課長代理 立石 公平 ・学校法人KBC学園 インターナショナルリゾートカレッジ 教務部長 近藤 賢宏 教務課長 新里 玲子 教務課主任 田村 明子 ・株式会社国際旅行社 取締役総務部長 山城 秀康 ・タピック沖縄株式会社 ユインチホテル南城 管理部 戦略人事 課長 高橋 俊博 ・沖縄ワタベウェディング株式会社 人事総務グループ 人材開発チーム リーダー 新里 麻未子 ・JAL スカイエアポート沖縄株式会社 地域事業推進室 スーパーバイザー 川北 奈津子 ・学校法人KBC学園 学園本部 地域創生室 アドバイザー 仲宗根 真 ・学校法人KBC学園 学園本部 経営企画部 進路相談課 課長 兼 就職支援担当 喜納 政一 <p>(オブザーバー)</p> <p>株式会社穴吹カレッジサービス 常務取締役 教育事業部 事業部長 伊藤 慎二郎 教育事業部 高松営業所 教育サポート課 課長 中村 多恵 教育事業部 岡山営業所 主任 広原 敬幸</p> <p>(議事録作成)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校法人KBC学園 学園本部 地域創生室 東 知範 |
| 議 題 | <p>議 事</p> <p>議題1 ヒアリング内容報告</p> <p>議題2 プログラム開発のための意見交換</p> <p>議題3 令和4年度活動予定報告</p> |
| 配布資料 | 配布資料 |

| | |
|------|--|
| | <p>①第2回委員会次第</p> <p>②観光系大学ヒアリングレポート</p> <p>③東京都立町田工業高校ヒアリングレポート</p> <p>④東京都教育庁ヒアリングレポート</p> <p>⑤具志川商業高校ヒアリングレポート</p> <p>⑥事業計画書</p> <p>⑦プログラム検討委員名簿_2021年度</p> |
| 会議概要 | <p>仲宗根よりスケジュール、配布資料の確認後、近藤が挨拶。仲宗根より各委員を紹介し、議題1にてヒアリング内容を報告。報告後、各委員より質問・意見を承る。休憩後、議題2に移り、プログラム開発のための意見を交換し、各委員より感想を承る。最後に仲宗根より今後の予定を説明し、近藤の挨拶にて終了。</p> |
| 内 容 | <p>議題1：ヒアリング内容報告</p> <ul style="list-style-type: none"> ・資料②から⑤についてPPを使い仲宗根が報告 <p>意見、質問等</p> <p>(宮城委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・職業人講話は年間8コマ、8時間で実施してほしい。 ・空港やウェディング関係のジョブシャドウイングは生徒も喜ぶと思う。今後ともお願いしたい。 <p>(川北委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ジョブシャドウイングの受け入れ実績は当社ではない。小学生を対象に空港の業務を見る見学会の実績がある。 ・ジョブシャドウイングの前例はないがインターンシップより受け入れしやすいと思う。平等にすべての学生を受け入れるには良いと個人的に感じる。 <p>(新里麻未子委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ジョブシャドウイングとしての受け入れ実績はないが、就業体験等は積極的に受け入れている。小学生から高校生まで問い合わせがあった時に現場に行ってもらい担当者からの説明、企業、仕事内容を見てもらうといったことをしている。結果的にジョブシャドウイングに近い形になっているのではと思う。 <p>(高橋委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・就業体験などは積極的に受け入れている。 ・ジョブシャドウイングは高校生や大学生を対象に積極的に実施。例えばフロントにいきなり立って窓口業務を行うのは難しい。「今日は見ていて」と伝え、ここで何をしているか、どのように接客しているか感じてもらい、メモを取らせている。あえて「シャドウイング中」といったバッチを付け、お客様にもわかるようにしている。 |

| |
|--|
| <p>・営業職などホテルの裏側をなかなか見ることはないので、あえて座ってもらい電話を取る姿などを見学する取り組みを昨年度から実施。コロナの影響などもあったので、今までと違う方法でインターンシップを取り組み始めたところ。</p> <p>(仲宗根)</p> <p>・ジョブシャドウイングの受け入れ側の負担はどうか？</p> <p>(高橋)</p> <p>・職員がインターンシップに慣れている点もあるが特に問題はない。むしろ和気あいあいとできる。職員も乗ってくると自分が行っている業務の意味を話すなどするので、自身の仕事を振り返るきっかけにもなるよい効果を生んでいる。</p> <p>(山城委員)</p> <p>・今まで積極的に行っているわけではないが、小学生など児童向けに両親が当社で働いている前提でジョブシャドウイングを過去に数回行った。これが近いのではないかと思った。受け入れる企業にとってもインターンシップよりもカジュアルに取り組めるという印象を持っている。</p> <p>(仲宗根)</p> <p>・県内企業においてジョブシャドウイング等の受け入れ状況はどうか？</p> <p>(伊波委員)</p> <p>・現在、そのような情報はない。</p> <p>・令和2年度、3年度はインターンシップが中止になっているが、学校によっては職業人講話、地域の課題解決などに取り組んだという報告があった。令和3年度についてはこれから調査予定。</p> <p>・インターンシップは次年度から主に専門高校が実施予定ではあるが、コロナの影響で実施できるか不透明である。</p> <p>・高橋委員には高度人材育成のプログラムを通じて、夏休みにインターンシップを実施してもらった。今年度も実施する予定。この事業は従来のインターンシップとは別に普通高校などを含めた全高校生向けに行う予定(参加人数を限定)だが、実地での実習に加え、コロナの影響でリアルでの実施が難しい中オンラインでの実施や、オンラインミーティングと3時間から半日のジョブシャドー等を組み合わせたハイブリットで実施した経緯がある。</p> <p>・これからインターンシップなど体験型の活動の在り方が大きく変わるのではないかとの実感がある。仕事の在り方が変わる中で、いつまでもリアルな方法ではないと思うが、高校生にとっては実際に見る、肌で感じることに大きな意義があると思う。保護者や先生以外の大人と関わる感覚、挨拶や意見などコミュニケーションの取り方や「働くこと」などを学ぶ機会が大切だと思う。事業実施によるデータ等を分析しながらインターンシップの在り方について、現在検討しているところである。</p> |
|--|

| | |
|--|---|
| | <p>議題2：プログラム開発のための意見交換</p> <ul style="list-style-type: none"> ・資料⑥を使い、仲宗根がプログラムの内容、概要、背景等を説明 <p>意見、要望、期待等</p> <p>(宮城)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・多くの業種、学校の方に協力して頂きながら生徒の職業観育成、進学・就職といった進路決定まで手伝って頂けると助かる。 <p>(立石委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・沖縄全体で観光客をもてなすことや業界・業種の壁がどこまで取り払えるかが重要かと思う。 ・高校には指導要領があるので、カリキュラムをさわることは難しいと思うが航空業界やブライダル業界など観光に携わる業界が業種に関わらず、若い世代にどこまでできるか、もてなすことができるかだと思う。 ・例えば旅行業に興味のある子たちに対しては、関係する施設の割引。ホテルに興味のある子に対しては特別な割引料金などをし、魅力をもっと知ってもらうきっかけが重要。 ・専門学校に関していうと今までは何となく運営できていたが、さらに専門性が求められると思うので教職員がより業界と密接にし、ブラッシュアップ等の研修を含めもっと勉強していかないといけない。そうでないと高校現場から求められるニーズの授業ができなくなってしまう課題も出ると思う。 ・5年間の学びに対し、どうモチベーションを維持していくか。その対応として検定等もあると思うが、沖縄の観光施設等をもっと知ってもらい、仕事を始めたとき自身の体験を元に観光客に対して生きた情報を伝えられるよう、若い子たちに対し観光施設やホテル・空港を利用してもらう施策も面白いと思う。 ・ホテルでいうコンシェルジュのようなイメージ。自身もホテル勤務時代、実際に施設等を利用してもらった。生きた情報を提供するためには利用してもらわなくてはならない。業界・業種の壁と取り払うことがキーになると思う。 <p>(近藤委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ジョブシャドウイングがとっても入りやすいと思った。インターンシップは業種や業態によって受け入れがしにくい期間がある。専門学校としては参加前の事前学習や事後の振り返りで職業教育を踏まえた連携ができるのではないかと考えた。 ・事前学習等を踏まえての知識・技能の習得、実際の現場で得た情報を現場のスタッフと情報交換できることで表現できるのではないかと考える。振り返りの部分では、現場で求められる人材、方針等に触れると、社会人の仕事に対する思い、従事しているかといった点も学べる機会にもなると思う。また高校生にとって学ぶ態度などに対してブラッシュアップにつながると思う。そうい |
|--|---|

| |
|--|
| <p>った点で専門学校は良い連携ができるのではないかと思った。</p> <p>(新里玲子委員)</p> <ul style="list-style-type: none">・具志川商業で何度か職業講話を行ったことがある。語学系授業担当として、語学は人と接するあらゆる業種に関係していることを伝えている。沖縄は観光立県なのでタクシードライバーやコンビニ店員でもあらゆるところでコミュニケーション力の向上を通し、観光業を支えているということを話している。・高校生は漠然としてリゾート、観光といった学科に入学してくる。業種までは絞れていない子がたくさんいると思う。小学生向けにはジョブシャドウイングやキッズニアといった施設で職業体験できる機会がある。高校生にも専門学校へ行く前に業種を知るこのような体験ができればと考えているが、この高専連携の取り組みがよい機会になるのではと思う。 <p>(田村委員)</p> <ul style="list-style-type: none">・企業との連携が一番大事になると思う。プライダルの分野で考えると、コロナ禍の影響で結婚式や披露宴が減少している状況から職業に触れる中学生・高校生が減っている。言葉ではなかなか伝わらない仕事のやりがい、仕事の種類など体験を通して知ってもらいプライダル業界やそれ以外の興味を持っていなかった業界にも行ってみたいと思うことをしていかないと、観光業界の人材が不足していってしまうと考えている。・職業を知ってもらえるインターンシップ、ジョブシャドウイングをうまく取り入れながら中学、高校生に体験してもらえる取り組みはやっていかないといけないと思う。・観光業を学びたいと専門学校へ入学してきたら、地元の人が沖縄の良さを実感できる機会が少ないので、沖縄の良さをプラスした知識を知ることで新しい価値観を知る人材育成や業界とのミスマッチを防ぐことで長く業界に貢献してもらえらると思う。企業と連携した体験学習を進めていければと思う。 <p>(山城)</p> <ul style="list-style-type: none">・今までのインターンシップより掘り下げることができることはないかと考えた。例えば、テーマを絞って学生と一緒に商品開発やマーケティングの実施、実際に商品を販売するといった一貫したインターンシップができそうだと思う。・例えば掛け合わせる事例として、介護を必要としている方に向けて、介護の支援を行いながら旅行に同行できるなど介護の知識を加え、ターゲットを絞った商品の開発を手掛けるなどインターンシップを掘り下げできないかイメージを持った。 <p>(新里麻未子)</p> <ul style="list-style-type: none">・プライダルの採用に携わる立場にはなるが、コロナ禍によりプライダルに触 |
|--|

れる機会が減っている。観光業に対するイメージが大打撃を受けている。両親など周りの大人によるマイナスのイメージが中高校生に影響することがあると最近聞く。インターンシップに行ける機会が無い中、ウェブなどの情報でイメージが固まりやすくなっていると思う。

- ・企業の意見として、自分の目で見て判断することが大事であることを伝えてほしい。短期的にはなるが、自分の学校の卒業生の働く姿、活躍している姿を見られると少なからず影響を受けると思う。先輩の働く姿を見せる機会を増やしたり、卒業生が働く企業の担当者が講話を行うなどリアルな現場の声を届けられる機会がもっとあってもよいと感じている。

- ・安定を求める学生も増えている印象はある。スケールが大きくなってしまいが観光業、自分たちの企業が県や観光業にどのような影響を与えているといった可能性を伝えられる授業があるといいと思う。

(川北)

- ・企業側の視点で考えると、漠然としていても観光業界に関わりたいという気持ちのある学生は、沖縄が好き、多くの人とコミュニケーションをとることが好き、海外に憧れがあるといった何かしらの共通点があると思う。興味を持つ部分、例えば沖縄の文化を改めて知り、自分の視野を広げ経験を積むことによって感受性を高めてもらえると、企業に就職することがゴールではなく、そこから感じて成長していくことを知ることが学生にとっては大事。プログラムの中でたくさんの体験の場をつくりたいと考えている。

- ・仕事を通じて初めて知ること、業界の苦勞、失敗など生の声を伝えることが大事と思う。実際の空港の雰囲気、定時運行を守る緊張感など、見て肌で感じないとわからない部分もある。学生にとって職業講話などの後にジョブシャドウイングとつなげていくことに意味があり、やはりこの業種を目指したいと気持ちにもなると思う。

(伊波)

- ・生徒が体験活動等を通じて学ぶ価値が大きい。知識を得ても実際に体験しないと腑に落ちないので、どのように体験する機会を作るかが課題。インターンシップが実施できていない中、学校からは実施してほしいとの声が多い。現状としてできる状況でないのにこれに代わる方法を考えるなかであって、生徒にとって体験できる学びが大切であると痛感している。

- ・学校の要望を聞きながらプログラムを作って頂きたい。インターンシップやジョブシャドウイングは事前、事後の指導が大切。なぜ学ぶのか、なぜ働くのかといった根本的な部分を抑えないと、生徒たちにはおちてこない。高校でも「働く意義」についてしっかりと指導していく必要があると思っている。

- ・学習指導要領では、勤労観や職業観について説明がされていない。勤労観は

日常生活で育成することができるが、職業観、職業理解は学校や地域などの協力を得ながら育成していく必要がある。業種の理解など1つの企業とっても会計や営業などいろいろな部署がある。それらの理解がまだ足りていないと感じることもあるので職業理解に力を入れてほしい。それらを踏まえると企業の協力は非常に大切で、それをつなぐ専門学校の力とが一体的になったプログラムができれば、よい方向で人材が育成できると考えている。(もちろん、それ以外にも、検定やマナー指導など様々に関わってもらいたいと思いますが。)

(広原)

・過去に京都の大学で1年間を通じてインターンシップの授業を行った経験がある。今回のプログラム作成に協力することができると思う。話を聞いていて高校生は地域、社会とのつながりから学ぶこと、主体的に学ぶことが大切だと思った。現在、高校生全員がPCを持っている時代になっている。教育の改革はツールの改革と学びの改革が大きく挙げられる。これらを踏まえ、例えばジョブシャドーイングに行った高校生が動画を撮影、編集を行いオンラインでアップする。それを専門学生がサポートしていく。これは観光分野ではなく、デザイン系の学校でも可能なので、専門学校全体でサポートしていくことができると考えている。

・問題解決型の人材育成に関しては、主体的に学ぶことが大切なのでグループワークを中心に専門学生と一緒に新しいイベントなどを考えていくなどできないかと思った。限られた時間の中で具体的にしていけるので8コマの時間で最大の効果が出るプログラムを複数用意し、ピックアップできる体制にしていきたい。

議題3：令和4年度活動予定報告

・今後の予定について(仲宗根)

令和4年8月24日(水) 15:00~17:00

令和4年度 第1回プログラム検討委員会

その他：本日の参加お礼(近藤)

以上 委員会を終了する。

令和3年度文部科学省委託

「専修学校による地域産業中核人材養成事業による委託事業」

沖縄・観光分野における有機的高専連携プログラム開発・実証事業

事業報告書

令和4年3月

学校法人KBC学園 専修学校インターナショナルリゾートカレッジ

〒901-0155 沖縄県那覇市金城5丁目8番地6